

『摧邪輪』

(日本思想大系卷十五『鎌倉旧仏教』岩波書店刊)

於一向專修宗選撰集中「摧邪輪卷上」

門決^{第三}

*317下

一向專修宗選撰集中に於いて邪を摧く輪 卷上

夫仏日雖^レ没、余暉未^レ隱。法水雖^レ乾、遺潤尚存。三印分^レ邪正、五分別^レ内外。我等依^レ之嘗^レ甘露醒^レ毒醉。良如^レ聞^レ梵音、似^レ對^レ金容。以^レ之為^レ種智円因、以^レ之萌^レ無上覺芽。豈非^レ幸耶、非^レ喜耶。雖^レ然踰^レ躡愚子適值^レ慈父、而悶絶、失心狂子希受^レ良藥、以^レ不嘗^レ。何其咄耶。爰近代有^レ上人、作^レ一卷書。名曰^レ選撰本願念仏集。迷^レ惑於^レ經論、欺^レ誑乎^レ諸人。雖^レ以^レ往生行為^レ宗、反妨^レ礙往生行^レ矣。高辨年来於^レ聖人、深懷^レ仰信。以下為^レ所^レ聞種種邪見、在家男女等、假^レ上人高名、所^レ妄說^レ。未^レ出^レ一言、誹^レ謗上人。設雖^レ聞^レ他人之談說、未^レ必信^レ用之。然近日披^レ閱此選撰集、悲嘆甚深。聞名之始、喜^レ礼^レ乎^レ上人妙釈。披^レ卷之今、恨^レ驢^レ乎^レ念仏眞宗。今詳知、在家出家千万門流所^レ起種種邪見、皆起^レ自^レ此書。至^レ上人入滅之頃、興行倍盛。專鑿^レ于^レ板印、以為^レ後代重宝。永流^レ於^レ一門、而敬重如^レ仏經。惣以為^レ往生宗之肝要、念仏者之秘府。依^レ之適有^レ難者、負^レ過於^レ難^レ乎^レ念仏。希值^レ信人、擬^レ德於^レ信^レ乎^レ往生。遂使^レ一味法雨分^レ甘鹹之味、和合衆僧成^レ不同之失。何其悲乎。仍於^レ或處^レ講經說法次、出^レ二難^レ破^レ彼書。就^レ文義^レ有^レ多種訛謬。且置^レ之。唯出^レ大邪見過。邪說亦多種、且出^レ二種也。但有人云、此書更非^レ上人製作、是門弟所^レ選也云云。然者彼集與文云、而今不^レ圖蒙^レ仰辭謝無地。仍今愁集^レ念仏要義。唯顧^レ命旨、不^レ顧^レ不^レ敏。是即無慚無愧之甚也。庶幾^レ一經^レ高覽^レ之後、埋^レ于^レ壁底、莫^レ遺^レ窓前。恐為^レ不^レ令^レ破法之人墮^レ於^レ惡道也。己上。既有^レ此文。須^レ對^レ請人問^レ作者名字也。有人云、上人雖^レ有^レ深智、不^レ善^レ文章。仍無^レ自製之書記云云。設上人自雖^レ不^レ執筆、若印^レ可^レ之者、更不^レ免^レ其過。若上人不^レ印可^レ者、何故迄^レ滅後^レ鑿^レ于^レ板印、以為^レ龜鏡乎。若又雖^レ非^レ上人并門弟所^レ、彼一門有^レ

*318上

44夫れ仏日没すと雖も、余輝未だ隠れず。法水乾くと雖も、遺潤なほ存せり。三印、邪正を分ち、五分、内外を別す。我等これによつて、甘露を嘗め、毒酔を醒ます。まことに梵音を聞くがごとし、金容に對へるに似たり。これを以て種智の円因とし、これを以て無上の覺芽を萌す。あに幸にあらずや、喜にあらずや。然りと雖も、踰躡の愚子は、たまたま慈父に値ひて悶絶し、失心の狂子は、希に良藥を受けて以て嘗めず。何ぞそれ拙きや。

ここに近代、上人あり、一卷の書を作る。名づけて選撰本願念仏集と曰ふ。經論に迷惑して、諸人を欺誑せり。往生の行を以て宗とすと雖も、反つて往生の行を妨礙せり。高弁、年来、聖人において、深く仰信を懷けり。聞ゆるところの種種の邪見は、在家の男女等、上人の高名を假りて、妄說するところなりとおもひき。未だ一言を出しても、上人を誹謗せず。たとひ他人の談説を聞くと雖も、未だ必ずしもこれを信用せず。しかるに、近日この選撰集を披閱するに、悲嘆甚だ探し。

名を聞きしの始めには、上人の妙釈を礼せむことを喜ぶ。卷を披くの今は、念仏の眞宗を驢せりと恨む。今、詳かに知りぬ、在家出家千万の門流、起すところの種種の45邪見は、皆この書より起れりといふことを。上人入滅の頃に至つて、興行倍盛なり。専ら板印に鑿めて、以て後代の重宝とす。永く一門に流して、敬重すること仏經のごとし。惣じて往生宗の肝要、念仏者の秘府なりとおもへり。これによつて、たまたま難ざる者あれば、過を念仏を難するに負はす。希に信する人に値ひては、徳を往生を信するに擬せり。遂に一味の法雨に甘鹹の味を分ち、和合衆僧に不同の失を成さしむ。何ぞそれ悲しきや。仍つて或る處において講經說法の次に、三の難を出して、かの書を破す。

〔文義について、多種の訛謬あり。且くこれを置く。ただ大邪見過を出す。邪説もまた多種、且く二種を出すなり。ただし有る人の云く、「この書、さらに上人の製作にあらず、是れ門弟の撰するところなり」と云。しからば、かの集の奥の文に云く、「しかるに今、図らざるに仰を蒙る、辭謝するに地なし。仍つて今、

受二学此書、尚不_レ免_二其過_一也。若上人都無_レ知者、唯破_二此邪書_一也。更不_レ可_二簡_一別其作者_一也。

一撥_二去菩提心_一過失。(此過者、処処吐_レ言。教義俱分明也。)

二以_二聖道門_一譬_二群賊_一過失。(此過者、勸_二言陳下意許_一出_レ之。)

後日伝聞、彼座席有_二專修門人_一、大起_二忿諍_一曰、選_二択集中全無_一

此義。此出_二自僻見_一也云云。余因聞_二此事_一、為_レ糾_二邪正_一、粗記_二

一二。夫蛇飲_レ水成_レ毒、牛飲_レ水成_レ乳。邪人聞_レ法成_レ煩惱、正人

聞_レ法成_レ菩提。其邪正易_レ迷、善惡難_レ分。若得_二分別者_一、二利道

是滿。是故於_二諸行_一皆有_二誑偽_一。學者宜_レ准簡。勿_レ令_二自心墜_一中。

香象大師梵網經疏、約_二三学及雜行_一、各別引_レ經論文_一出_二其咎_一立_二

大賊名_一。然戒定慧_三学、各有_二別相_一。第四出_二雜行過_一云、四雜行者、

亦有_二三類_一。一約_二福行者_一、謂性非_レ質直、苟_レ奸計共崇_二奇福_一。眩_二

耀世人招_二引重觀_一。意在_二以_レ少呼_レ多。用_レ此活命。既遂_二其所求_一、

即恃_レ此起_レ慢。凌_レ蔑余人無_レ利養_一者。悉以_レ苟非_二利養_一。既爾名聞

亦然。此是_レ売_二仏法_一賊。出_二迦葉經_一。二約_二余行者_一、謂性非_レ慧悟、

隨学_二一法_一即便封著。眩_二此所学_一、以_レ招_二名利_一、撥_二余所修皆非_一

究竟。此亦愚人毒_二害仏法_一賊也。文。此中於_二雜行中_一、亦有_二三類_一。

今称_二名行_一、當_二第二類_一。然其心不_レ与_二正理_一相応_一者、亦可_レ有_二毒_一

害仏法_一遇_一。若有_二此過_一者、如_レ服_二良藥_一起_レ病。以_レ何療_レ之。似_二

入_二水中_一出_レ火。以_レ何滅_レ之。仏藏十輪等諸經、大誠_二此大罪_一。自

他宗章疏盛所_二引積_一也。懸_二思乎此文_一、用心莫_レ間斷。正理唯一門、

行者是_二千万_一、入者尠、迷人多。今依_二聖教_一檢_二察此集宗要_一、大違_二

背法印_一、相_二順邪道_一。將_レ令_二婦信人荷_一重罪。依_レ之愚僧天性雖_レ倦_二

於執筆_一、試撰_二一章_一、聊決_二邪正_一。哀哉、悲哉。日月如_レ矢走奪_二我_一

愍に念仏の要義を集む。ただ命旨を顧みて、不敏を顧みず。是れ即ち無漸無愧の甚しきなり。庶幾はくは、一たび高覽を経ての後は、壁の底に埋みて、窓の前に遺すことなかれ。恐らくは、破法の人をして、惡道に墮せしめざらんがためなり。」(白上)既にこの文あり。すべからず請ふ人に対して、作者の名字を問ふべきなり。有る人の云く、「上人、深智ありと雖も、文章に善からず。仍つて白製の書記なし」と云ふ。たとひ上人、自ら筆を執らずと雖も、もしこれを印可せば、さらにその過を免れず。もし上人、印可せずは、何が故ぞ、滅後に迄つて、板印に鑿めて、以て龜鏡とするや。もしまた、上人ならびに門弟の所撰にあらずと雖も、かの一門この書を受学することあらは、尚しその過を免れざるなり。もし上人、都て知ることなくは、ただこの邪書を破するなり。さらにその作者を簡別すべからざるなり。

46 一は、菩提心を撥去する過失。(この過は、処処に言を吐けり。教義俱に分明なり。)

二は、聖道門を以て群賊に譬うる過失。(この過は、一の言陳の下の意許を勸へてこれを出す。)

後日伝へ聞く、かの座席に專修の門人あつて、大いに忿諍を起して曰く、「選_二択集中全無_一

の中に全くこの義なし。これは自ら僻見を出すなり」と云云。余、この事を聞くに因ん

で、邪正を糾さんがために、ほぼ一二を記す。夫れ蛇は水を飲んで毒と成し、牛は水を

を飲んで乳と成す。邪人は法を聞いて煩惱と成し、正人は法を聞いて菩提と成す。そ

の邪正迷ひ易く、善惡分ち難し。もし分別することを得ば、二利の道是に滿ず。この

故に、諸行において、皆誑偽あり。學者宜しく准簡すべし。自心をして中に墜さしむ

ることなかれ。

香象大師の梵網經の疏に、三学および雜行に約して、おのおの經論の文を引いてそ

の咎を出して大賊の名を立つ。しかるに戒定慧の三学は、おのおの別相あり。第四に

雜行の過を出して云く、「四に雜行とは、また二類あり。一に福行に約せば、謂く、性、

質直にあらずして、苟くも奸計して共に奇福を崇む。世人を眩耀して重觀を招引す。

意は少を以て多を呼ぶに在り。これを用つて活命す。既にその所求を遂げて、即ちこ

れを恃んで慢を起す。余人の利養なき者を凌蔑す。ことごとく以て苟くも利養にあら

ず。既に爾り、名聞もまた然り。これは是れ仏法を売る賊。迦葉經に出でたり。二は

余行に約せば、謂く、性、慧悟にあらずして、随つて一法を学して即便ち封著す。こ

の所学を眩して、以て名利を招いて、余の所修は皆究竟にあらずと撥す。これはまた

47 愚人、仏法を毒害する賊なり。」文。

この中に雜行の中において、また二類あり。今の称名の行は、第二類に当れり。し

かれどもその心正理と相応せざれば、また仏法を毒害する過あるべし。もしこの過あ

らば、良藥を服して病を起すがごとし。何を以てかこれを療せん。水中に入つて火を

短命。応下救三頭燃一求解脱。何邊作二自他偏執三乎。是故不レ非一
 称名行、不レ背善導積。於三正念正見念仏者、悉奉三歸命頂礼、必
 可レ蒙三来世引導。然若邪正雜乱、一切有縁佛法、不三相当根機一尽、
 一切根器、不三相当有縁佛法一竭。依レ之滅三三宝、損三国土。善神
 捨レ国、惡鬼入レ国、興三三災、廢三十善。基無レ不レ由レ之。抄至相
 五十要問答意也。況大邪見過、損害自他善根、師及弟子俱墮大地
 地獄。是大聖金説、勿レ生三疑滯。是故若欲三速生淨土者、須レ好二
 正見。邪正雜乱、往生難レ期。決断分明、解脱自到。大望唯為二一
 事也。謂可三棄三捨此撰撰集也。何者善惡諸業依三作法受三得之。
 菩提心亦有二此義。不空菩提心義云、長耳三藏云、初習種姓發心有
 二。一、仮想發、二、輕想發、三、信想發。初、仮想發者、由三種力一。
 一、善友力、謂善知識。二、行力、謂受律儀。三、法力、通別二因。通
 謂如来藏内熏之性、別謂信等五根。由三此三力一、仮起三求菩提相一。
 自利利他、漸次修習等云云。謂近代女人等之念仏者、持三此邪書一
 為二行力一、受三此邪律一為三正儀。自不レ辨三邪正、心漸背三佛法、適謂
 入三無上乘、誤住三邪見道。何其悲乎。須三拱三手念仏。幸不レ捧三
 此邪書一、是亦似三偏執。智人垂三思量二而已。

*319上

大文第一撥去菩提心過失者、彼集一卷中多处有此文。今出二
 五段文破レ之。於レ中有二五種大過。一、以三菩提心不レ為三往生極樂
 行一過、二、言三弥陀本願中無三菩提心一過、三、以三菩提心為三有上小

出すに似たり。何を以てかこれを滅せん。仏藏・十輪等の諸経には、大いにこの大罪
 を誡めたり。自他宗の章疏に盛んに引き積するところなり。恩をこの文に懸けて、用
 心間断することなかれ。正理はただ一門、行者は是れ千万、入る者は少く、迷ふ人は
 多し。今聖教によつてこの集の宗要を檢察するに、大いに法印に違背し、邪道に相
 順ぜり。まさに帰信の人をして重罪を荷せしめんとす。これによつて、愚僧、天性執
 筆に倦しと雖も、試みに一章を撰して、いささか邪正を決す。

哀なるかなや、悲しきかなや。日月矢のごとくに走つてわが短命を奪ふ。まさに頭
 燃を救つて解脱を求むべし。何ぞ自他の偏執を作すに違あらんや。この故に称名の行
 をも非せず、善導の積をも背かず。正念正見の念仏者においては、ことごとく帰命頂
 礼し奉り、必ず来世の引導を蒙るべし。しかるにもし邪正雜乱すれば、一切の有縁の
 佛法は、根機に相当らずして尽きぬ、一切の根器は、有縁の佛法に相当らずして竭き
 ぬ。これによつて三宝を滅し、国土を損ず。善神、国を捨て、惡鬼、国に入つて、三
 災を興し、十善を廢す。基これによらざるることなし。至相の五十要問答の意を抄するなり。

況んや大邪見の過は、自他の善根を損害して、師および弟子俱に大地獄に墮つ。是
 48れ大聖の金説、疑滯を生ずることなかれ。この故にもし速かに淨土に生ぜんと欲はば、
 すべからく正見を好むべし。邪正雜乱すれば、往生期し難し。決断分明ならば、解脱
 自ら到らん。大望ただ一事のためなり。謂くこの撰撰集を棄捨すべきなり。何とな
 らば、善惡の諸業は作法によつてこれを受得す。菩提心にまたこの義あり。不空の菩
 提心義に云く、「長耳三藏の云く、初習種姓發心に三あり。一に仮想發、二に輕想發、
 三に信憑發。初めに仮想發とは、三種の力による。一に善友力、謂く善知識。二に行
 力、謂く受律儀。三に法力、通別二因あり。通とは謂く如来藏内熏の性、別とは謂く
 信等の五根。この三力によつて、仮りに求菩提の相を起す。自利利他して、漸次に修
 習す」等と云云

謂く、近代女人等の念仏者、この邪書を持するを行力とす、この邪律を受くるを正
 儀とす。自らは邪正を弁へず、心漸く佛法を背く、たまたま無上乘に入ると謂へども、
 誤つて邪見の道に住す。何ぞそれ悲しきや。すべからく手を拱いて念仏すべし。幸に
 この邪書を捧げざれ。是れまた偏執に似たり。智人思量を垂れよのみ。

大文第一に菩提心を撥去する過失とは、かの集一卷の中に多处にこの文あり。今五
 段の文を出してこれを破す。中において五種の大過あり。一は菩提心を以て往生極樂
 の行とせざる過、二は弥陀の本願の中に菩提心なしと言ふ過、三は菩提心を以て有上

利過、四言雙觀經不說菩提心并言彌陀一教止住時無菩提心過、五言菩提心抑念仏過也。

第一以菩提心不為往生極樂行過者、集曰、彌陀如來不以下余行為往生本願、唯以念仏為往生本願之文。無量壽經上云、設我得仏○

觀念法門引上文二言、苦我成仏○
往生礼讚岡引上文二云、○

私云、○問曰、彌陀如來於何時何仏所發此願乎。答曰、壽經云、仏告阿難、○於是世自在王仏即為廣說二百一十億諸仏刹土人天之善惡国土之麤妙、○又大阿彌陀經云、其仏即選二百一十億諸仏国土中諸天人民之善惡国土之好醜。為選取心中所願、樓夷亘羅仏（此云世自在王仏）説經畢。曇摩迦（此云法藏）便一其心、即得天眼徹視、悉自見二百一十億諸仏国土中諸天人民之善惡国土之好醜、即選取心中所願、便結得是二十四願經。

*39下

（平等覺經亦復同之。）此中選取者、即是取捨義也。謂於二百一十億諸仏淨土中、捨人天之惡、取人天之善、捨国土之醜、取国土之好也。大阿彌陀經選取義如是。雙觀經意亦有選取義。謂云撰取二百一十億諸仏妙土清淨之行是也。選取与撰取、其言雖異、其意是同。然者捨不清淨之行、取清淨之行也。上天人之善惡国土之麤妙、其義亦然。准之応知。夫約四十八願一往各論選取撰取之義者、第一無三惡趣願者、於所觀見之二百一十億土中、或有下有三惡趣之国土、或有下無三惡趣之国土。即選下捨其有三惡趣之麤惡国土、選下取其無三惡趣之善妙国土故、云撰取也。第二不更惡趣願者、於彼諸仏土中、或有下縱雖國中無三惡道、其國人天壽終之後、從其國去復更三惡趣之土、或有下不更惡道之土。即選下捨其更惡道之麤惡国土、選下取其不更惡趣之善妙国土故、云撰取也。○乃至第十八念仏往生願者、於彼諸仏土中、或有下以布施為往生行之士、或有下以持戒為往生行之士云云。（忍辱精進禪定般若出之。乃至）或有下以菩提

の小利とする過、四は雙觀經に菩提心を説かずと言ひ、ならびに彌陀一教止住の時、菩提心なしと言ふ過、五は菩提心、念仏を抑ふと言ふ過なり。

49第一に、菩提心を以て往生極樂の行とせざる過とは、集に曰く、「彌陀如來、余行を以て往生の本願とせずして、ただ念仏を以て往生の本願とするの文。」

無量壽經上に云く、設我得仏○
觀念法門に上の文を引いて云く、若我成仏○
往生礼讚に同じく上の文を引いて云く、○

私に云く、○問ひて曰く、彌陀如來、何の時、何の仏の所においてか、この願を發すや。答へて曰く、壽經に云く、仏、阿難に告ぐ、○是において世自在王仏、即ちために廣く二百一十億の諸仏の刹土、人天の善惡、国土の麤妙を説く、○また大阿彌陀經に云く、その仏即ち二百一十億の諸天人民の善惡、国土の好醜を選取す。心中所願の願を選取せしめんがために、樓夷亘羅仏（ここに、世自在王仏と云ふ）、經を説き畢んぬ。曇摩迦（ここに、法藏と云ふ）、便ちその心を一にして、即ち天眼を得て徹視して、ことごとく自ら二百一十億の諸仏の国土の中の諸天人民の善惡、国土の好醜を見て、即ち心中の所願を選取して、便ちこの二十四願經を結得す。（平等覺經、亦復これに同じ。）この中の選取とは、即ち是れ取捨の義なり。謂く、二百一十億の諸仏の淨土の中において、人天の惡を捨てて、人天の善を取る、国土の醜を捨てて、国土の好を取るなり。大阿彌陀經の選取の義、是のごとし。雙觀經の意、また選取の義あり。謂く、二百一十億の諸仏の妙土清淨の行を撰取すと云ふ、是れなり。選取と撰取と、その言は異なるなりと雖も、その意、是れ同じ。しからば不清淨の行を捨てて、清淨の行を取るなり。上の天人の善惡、国土の麤妙、その義また然り。これに准じてまさに知るべし。夫れ四十八願に約して、一往おのおの選取撰取の義を論ぜば、第一に無三惡趣の願とは、觀見するところの二百一十億の土の中において、或いは三惡趣あるの国土あり、或いは三惡趣なきの国土あり。即ちその三惡趣ある麤惡の国土を選捨して、その三惡趣なき善妙の国土を選取するが故に、選取と云ふなり。第二に不更惡趣の願とは、かの諸仏土の中において、或いはたとひ國中に三惡道なしと雖も、その国人天壽終つての後、その国より去つてまた三惡趣に更るの土あり、或いは惡道に更らざるの土あり。即ちその惡道に更る麤惡の国土を選捨して、その惡趣に更らざる善妙の国土を選取るが故に、選取と云ふなり。○乃至、第十八の念仏往生の願とは、かの諸仏土の中に

心^二為^二往生行^二之土^上。○即今選^二捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行^一、選^二取專稱^二仏号^一故、云^二選^二取^一也。〈已上集文。〉

決曰、先須^二辨^二定菩提心義^一。問曰、言^二菩提心^一者、何為^レ義。答。

經論所說章疏解^レ釈、広博無際。今須^レ標^二大綱^一。且就^二淨土家^一、如^二善導觀經疏^二第三云^一。言^二發菩提心^一者、此明^二衆生欣心趣大^一。不^レ可^二淺發^一。小因^一。自^レ非^二広發^二弘心^一、何能得^レ与^二菩提相會^上。唯願我身

身同^二虚空^一、心齊^二法界^一、尽^二衆生性^一。我以^二身業^一、恭敬供養禮拜迎^二送來去^一運度令^レ尽。又我以^二口業^一、讚嘆說法、皆受^二我化^一、言

下得^レ道者令^レ尽。又我以^二意業^一、入^レ定觀察、分^二身法界^一、応^レ機而度、無^二一不^レ尽^一。我發^二此願^一。運運增長、猶如^二虚空^一。無^レ処不^レ遍。

行流無^レ尽、徹^二窮後際^一、身無^二疲倦^一、心無^二厭足^一。又言^二菩提^一者、即是^二仏果之名^一、又言^二心者^一、即是^二衆生能求之心^一故、云^二發菩提心^一也。

〈已上〉解曰、此惣說^二菩提心行相并名義^一也。又元曉師遊心安樂道

○云、所^レ言正因、謂發^二無上菩提心^一也。即不^レ顧^二世間富樂及与^二二乘菩提涅槃^一、一向志^二願三身菩提^一、名^二無上菩提之心^一。惣標雖

然、於^レ中有^二一^一。一者隨事發心、二者順理發心。言^二隨事^一者、煩惱無數、欲^二悉斷^一之、善法無量、願^二悉修^一之、衆生無辺、願^二悉度^一之。於^二此三事^一、決定期願。初是如來斷德正因、次是如來智德

正因、第三心者恩德正因。三德合為^二無上菩提^一。即是^二三心惣為^一無上菩提之因。因^レ異雖^レ異、広長量齊等。無^レ所^レ遺、無^レ不^レ包故。

〈乃至〉所^レ言順理發心者、信^レ解諸法皆如^二幻夢^一、非有非無離言絶慮。依^二此信解^一、發^二廣大心^一等云云。菩提心行相略說如^レ是。此二

發心行相、広如^二說經論說^一。取^レ要言^レ之、言^二菩提^一者、即是^二仏果一切智智^一、言^二心者^一、於^二此一切智智起^一希求心。指^レ此云^二菩提心^一。

一切仏法、皆依^二此心^一得^二生起^一。此希求心、隨^二初後位^一有^二淺深不同^一。声^二其不同^一、亦有多種。今且依^二一說^一、華嚴表公出^二四發心^一。

一縁發心、謂仰^二縁菩提^一而發心求、名^二縁發心^一、未入位前也。二解發心、謂解^二一切法悉是菩提^一、名^二解發心^一、十信十解位也。三行發

*320下

において、或いは布施を以て往生の行とするの土あり、或いは持戒を以て往生の行とするの土ありと云云。〈忍辱・精進・禪定・般若これを出す。乃至〉或いは菩提心を以て往生の行とするの土あり。○即ち今、前の布施・持戒乃至孝養父母等の諸行を選捨して、専ら仏号を稱するを選取るが故に、選取と云ふなり。〈已上、集の文。〉

決して曰く、まづすべからず菩提心の義を弁定すべし。問ひて曰く、菩提心と言ふ

は、何をか義とする。答ふ。經論の所說、章疏の解^レ釈、広博無際なり。今、すべからず大綱を標すべし。且く淨土家につくに、善導の觀經の疏の第二に云ふがごとし。「發

菩提心と言ふは、これは衆生の欣心趣大を明かす。浅く小因を發すべからず。広く弘51心を發すにあらざるよりは、何ぞ能く菩提と相會することを得ん。ただ願はくは、わが身、身は虚空に同じく、心は法界に齊しく、衆生性を尽さん。我、身業を以て、恭敬

供養し禮拜して來去を迎送して、運度して尽さしめん。また我、口業を以て、讚嘆說法して、皆わが化を受け、言下に道を得ん者をして尽さしめん。また我、意業を以て、

定に入りて觀察して、身を法界に分つて、機に應じて度し、一として尽さざることなからん。我、この願を發す。運運に增長して、猶し虚空のごとし。処として遍せざる

ことなし。行流無^レ尽にして、後際を徹窮せば、身、疲倦なく、心、厭足なからん。また菩提と言ふは、即ち是れ仏果の名、また心と言ふは、即ち是れ衆生の能求の心なる

が故に、發菩提心と云ふなり。〈已上〉解して曰く、これは惣じて菩提心の行相ならびに名義を説くなり。

また元曉師の遊心安樂道に、菩提心において惣別の行相を出す。即ち安樂道に云く、「言ふところの正因は、謂く無上菩提心を發すなり。即ち世間の富樂とおよび二乘

の菩提・涅槃とを顧みず、一向に三身の菩提を志願するを、無上菩提の心と名づく。惣標然りと雖も、中において二あり。一は隨事發心、二は順理發心。隨事と言ふは、

煩惱の無數なる、ことごとくこれを断ぜんと欲ふ、善法の無量なる、ことごとくこれを修せんと願す、衆生の無辺なる、ことごとくこれを度せんと願す。この三事において、決定して期願す。初めは是れ如來斷德の正因、次は是れ如來智德の正因、第三心

は恩德の正因。三德合して無上菩提とす。即ちこの三心を惣じて無上菩提の因とす。52因果異なりと雖も、広長の量、齊等なり。遣るところなく、包ねざることなきが故に。

〈乃至〉言ふところの順理發心とは、話法は皆幻夢のごとし、非有非無、離言絶慮なりと信解す。この信解によつて、広大の心を發す」等と云云。

菩提心の行相、略説するに是のごとし。この二發心の行相は、廣くは諸經論に説く

心、謂一切行皆合_二菩提、名_二行發心、十行十向位也。四體發心、亦名_二証發心。謂証_二一切性、即是菩提自体顯發、名為_二體發心也。初地已上至_二金剛心是也。今依_二善導意、於_二淨土家、可_レ取_二緣發心。何者、出_二九品人、破_二諸師配_二大小位次、唯一向取_二凡夫。先判_二上品上生人云、正是仏去_レ世後大乘極善上品凡夫云云。以下八品倍劣此。上品既不_レ配_二位次。然云_二道俗時衆等各發無上心等、以_二菩提心_二為_二往生正因_二故。明知於_二四發心中、取_二緣發心也。又安樂集上卷、明_二發菩提心義。內有_二四番解釋。一出_二菩提心功用、二出_二菩提名體。三顧_二菩提心有_レ異。四問答解釋。第一者、大經云、凡欲_二往_二生淨土、要須_レ發_二菩提心_二為_レ原。云何菩提者、乃是無上仏道之名也等云云。第二番出_二三身菩提。第三番顯_二發心異_二有三種。謂理行慈悲為_二二也。此之三因、能與_二大菩提_二相應故、名_二發菩提心。又拋_二淨土論云、今言_二發菩提心者、正是願作仏心。願作仏心者、即是度衆生心。度衆生心者、即攝_二取衆生_二、生有仏国土_二心。今既願_レ生淨土故、先須_レ發_二菩提心_二也。第四番解釋文広多、具可_レ見_二正文。又天親無量壽經論、說_二三種達菩提門法。謂依_二智慧慈悲方便三門。遠_二離自利_二故。又說_二三種順菩提門法。謂依_二無染清淨心安清淨心樂清淨心三門、以_二利他_二為_レ本故。此等解釋、不_レ違_二具出。其綱要如_二前兩師解釋說_二而已。

*311上

がごとし。要を取ってこれを言へば、菩提と言ふは、即ち是れ仏果の一切智智、心と言ふは、この一切智智において希求の心を起す。これを指して菩提心と云ふ。一切の仏法、皆この心によって生起することを得。この希求の心、初後の位に随つて、浅深の不同あり。その不同を言ふに、また多種あり。今且く一説によるに、華嚴の表公、四發心を出す。「二は緣發心、謂く菩提を仰緣して發心して求むるを、緣發心と名づく、未人位の前なり。二は解發心、謂く一切の法、ことごとく是れ菩提なりと解するを、解發心と名づく、十信十解の位なり。三は行發心、謂く一切の行、皆菩提に合するを、行發心と名づく、十行十向の位なり。四は體發心、また証發心と名づく。謂く一切の性を証す、即ち是れ菩提の自体顯發するを、名づけて體發心とするなり。初地已上より金剛心に至るまで、是れなり。」今善導の意によるに、淨土家においては、緣發心を取るべし。何とならば、九品の人を出すに、諸師の大小の位次に配するを破して、ただ一向に凡夫を取る。まづ上品上生の人を判じて云く、「正しく是れ仏世を去つて後の大乗極善の上品の凡夫」と云云。以下の八品は、倍これよりも劣なり。上品既に位次を配せず。しかるに「道俗時衆等各發無上心」等と云つて、菩提心を以て往生の正因53とするが故に。明らかに知りぬ、四發心の中において、緣發心を取るなり。

また安樂集の上卷に、發菩提心の義を明かす。内に四番の解釋あり。「一は菩提心の功用を出し、二は菩提の名體を出す。三は菩提心に異なることを顯はす。四は問答解釋。第一は、大經に云く、およそ淨土に往生せんと欲はば、要すべからず菩提心を發すを原とすべし。いかに菩提とは、乃ち是れ無上仏道の名なり」等と云云。第二番に三身の菩提を出す。第三番に發心の異を顯はすに三種あり。謂く理・行・慈悲を三とするなり。「この三因、能く大菩提と相應するが故に、發菩提心と名づく。また淨土論に抛るに云く、今發菩提心と言ふは、正しくこの願作仏の心なり。願作仏の心とは、即ち是れ度衆生の心なり。度衆生の心とは、即ち衆生を撰取して、有仏の国土に生れしむる心なり。今既に淨土に生れんと願するが故に、まづすべからず菩提心を發すべきなり。」第四番の解釋の文、広多なり、具には正文を見るべし。また天親の無量壽經論に、三種の違菩提門の法を説く。謂く、智慧・慈悲・方便の三門によつて、自利を遠離するが故に。また三種の順菩提門の法を説く。謂く無染清淨心・安清淨心・樂清淨心の三門によつて、利他を以て本とするが故に。これらの解釋、具に出すに違あらず。その綱要、前の兩師の解釋に説くがごときのみ。

問ひて日く、この菩提心、諸教において差別ありとやせんや。

問曰、此菩提心、為_レ於_二諸教_二有_レ差別乎。答。三乘行者、於_二

三乘菩提、起_二希求心_一。隨_二其三根差別_一、出_二三種菩提_一。謂_二聲聞菩提、緣覺菩提、諸仏菩提_一。此如_二十地論等說_一。此中所_レ論者、正取_二諸仏菩提_一。即是大乘諸菩薩所起菩提心也。雖_レ有_二分位不同_一、甘心體無_二差別_一也。

問。見_二所引表公解釋_一、此四發心外、亦出_二三發心_一、亦出_二六發心_一。又見_二經說_一、明_レ觀身過患發菩提心思惟諸仏發菩提心等多種不同。又見_二論說_一、或云_レ有_二願心分位心二種_一、或云_レ有_二直心深心大悲心三相_一。諸宗積文亦以可_二不同_一。何云_二無差別乎_一。答。彼中或說_二因起_一、或說_二行相_一、有_二此不同_一。謂_二其體者、於_二應得等三仏性中_一、即是加行因性。如_二仏性論說_一。比因性、若有_二差別者_一、應得因円満因亦可_レ有_二差別_一。苦言_レ爾者、應得因者、即是_二空所現真如、円満因者、即是_二十地十波羅密等_一。此豈可_レ有_二差別乎_一。加之菩提心者自性空為_二義_一。空法即無_レ有_二差別_一也。依_レ之竜樹大聖造_二菩提心離相論_一、演_二菩提心性無相義_一。即如_二彼論云_一。菩提心者、離_二一切性_一。問曰、此中云何離_二一切性_一。答。謂_二蘊処界離_一諸取捨、法無我平等、自心本来不生。自性空故等云云。解曰、此約_二大乘說_一菩提心體。与_二法無我理_一相応心、指_レ此云_二菩提心_一。

問曰、此心最為_二甚深_一。我等未_レ知_二法無我等道理_一。何發_二菩提心_一乎。答。此心非_二甚深_一。謂_二行者遇_二善縁_一、率爾縁_二仏境_一、毛豎流涕、發_二希求心_一。推_レ檢此心自性、言_二下_一法無我理為_二所依_一。更非謂_二自知_二法無我等理_一也。是故同論下文云、又復識法は無常法、從_二無常_一生。彼無常性即菩提心。此說_二空義_一、亦不_二相違_一。若無常性即菩提心者、若愛_二樂菩提_一、是心平等而亦不_レ說_二愛樂彼空_一。取_二空之心_一、當_二云何得_一。當_レ知本来自性真實、一切成就菩提心義云云。此等約_二大乘菩提心_一、說_二其體性_一也。即此心順_二無我理_一、有_二広大用_一。約_レ識說_二所依者_一、即業識薰習心。以此心、為_二菩薩菩提心_一也。若順_二人無我理_一、無_二広大用_一。約_レ識說_二所依者_一、即分別事

*321下

答ふ。三乗の行者、三乗の菩提において、希求の心を起す。その三根の差別に随つて、三種の菩提を出す。謂く、声聞の菩提、縁覺の菩提、諸仏の菩提。これは十地論等54に説くがごとし。この中に論ずるところは、正しくは諸仏の菩提を取る。即ち走れ大乘の諸菩薩の所起の菩提心なり。分位の不同ありと雖も、その心體、差別なきなり。

問ふ。引くところの表公の解釈を見るに、この四發心の外に、また三發心を出す、また六發心を出す。また經説を見るに、觀身過患發菩提心・思惟諸仏發菩提心等の多種の不同を明かす。嘗た論説を見るに、或いは願心・分位心の二種ありと云ひ、或いは直心・深心・大悲心の三相ありと云ふ。諸宗の積文、また以て異なるべし。何ぞ無差別と云ふや。

答ふ。かの中に或いは因起を説き、或いは行相を説くに、この不同あり。その體を謂はば、應得等の三仏性の中において、即ち是れ加行因性なり。仏性論に説くがごとし。この因性、もし差別あらば、應得因・円満因、また差別あるべし。もし爾りと言はば、應得因とは、即ち是れ二空所現の真如、円満因とは、即ち是れ十地・十波羅密等。これに差別あるべけんや。しかのみならず、菩提心とは自性空を義とす。空法は即ち差別あることなきなり。これによつて竜樹大聖、菩提心離相論を造つて、菩提心性無相の義を演ぶ。即ちかの論に云ふがごとし。「菩提心とは、一切を離せる性。問ひて曰く、この中にいかに離_二一切性_一。答ふ。謂く蘊・処・界、諸の取捨を離れて、法無我平等にして、自心本来不生なり。自性空なるが故に」等と云云。解して曰く、これは大乘に約して菩提心の體を説く。法無我の理と相応する心、これを指して菩提心と云ふ。

55問ひて曰く、この心、最も甚深なりとす。我等未だ法無我等の道理を知らず。何ぞ菩提心を發さんや。

答ふ。この心甚深にあらず。謂く、行者善縁に遇ひて、率爾に仏境を縁じて、毛豎流涕して、希求の心を發す。この心の自性を推檢するに、法無我の理を以て所依とすと言ふ。さらに自ら法無我等の理を知ると謂ふとはあらざるなり。この故に同論の下の文に云く、「又復識る、法は是れ無常の法、無常より生ず。かの無常の性、即ち菩提心なり。これは空の義を説くなり、また相違せず。もし無常の性、即ち菩提心ならば、もし菩提を愛樂する、この心平等にして、またかの空を愛樂すと説かず。空を取るの心、まさにいかに得べき。まさに知るべし、本来自性真實にして、一切菩提心の義を成就せり」と云云。これらは、大乘の菩提心に約して、その體性を説くなり。

識。以_レ此心、為_二乘菩提心_一也。諸論中所說、名相建立雖_レ有_二不同、大意不_レ出_レ此、不_レ能委出而已。是故大乘菩提心、皆以_二空理為_レ體性、以_レ業識為_レ所依、以_レ仏境為_レ所求、以_レ衆生為_レ所縁也。是故諸教菩提心其體性無_レ差別也。〔已上多分約_二大乘終教說也。〕

問。於_二諸宗不_レ知_レ之、於_二聖道淨土二門菩提心、所起行業既別、能起菩提心何無_レ差別乎。答。雖_二所起行不同、約_レ心同是希求菩提涅槃、其心體更無_レ差別。如_二上所_レ出教量、即其証也。是故淨土門人師善導道綽等、皆言_下以_二無上菩提心為_レ正因_上、全不_レ出_二別體性。如_二彼解中說。雖_レ作_二此說、諸宗解釋有_二淺深不同_一。執_レ彼教文一人、定有_レ存_二異義_一歟。若有_二不同文者、是為_二淺深不同、非_レ體性有_レ差異。既云_二法無我平等心_一。何大乘宗立_二法我不平等義_一乎。當_レ知諸宗淺深者、即此無我義淺深差別也。可_レ思_レ之。

問曰、若許_レ有_二淺深異者、既成_二不同義_一。何云_二一體乎。答。譬_下如_二海水雖_二一味有_二淺深不同_上。菩提心體、如_二一味水_一。行相差別、如_二淺深不同_一。若執_下依_二教文淺深_上有_二差異_上者、諸教仏果淺深差別。為_下於_二仏果體_一有_二差別_上乎。苦言_二此不_レ爾者、彼亦可_レ同。如_レ是義理、不_レ違_二具出_一。設若執_下菩提心體於_二諸教_上實有_二差別_上者、須_下於_二淨土宗立_二別菩提心_一為_レ往生正因_上。然彼集中、釈_二觀經發菩提心文_一、雖_レ拳_二諸教菩提心名字_一、正出_二往生正因_一時、反撥_二遣之_一。兩関微定、更無_レ其謂_一也。

問。彼集中所_レ捨者、是依_二菩提心_一所_レ起諸行也。是以彼集処云_二菩提心行_一。但処処有_二直云_二菩提心_一者、是拳_二能發困_一、取_二所發行_一也。然者有_二何過_一乎。答。不_レ然。先彼集出_二選択念仏義_一中云、第十八念仏往生願者、於_二彼諸仏土中_一、或有_下以_二布施為_レ往生行_一

*322上

即ちこの心、二無私の理に順じて、広大の用あり。識に約して所依を説かば、即ち業識薰習の心なり。この心を以て、菩薩の菩提心とするなり。もし人無私の理に順じてほ、広大の用なし。識に約して所依を説かば、即ち分別事識なり。この心を以て、二乗の菩提心とするなり。諸論の中の所説、名相建立、不同ありと雖も、大意これを出でず、委しく出すに能はざるのみ。この故に、大乘の菩提心は、皆二空の理を以て體性とし、業識を以て所依とし、仏境を以て所求とし、衆生を以て所縁とするなり。この故に、諸教の菩提心、その體性、差別なきなり。〔已上、多分大乘終教に約する説なり。〕

問ふ。諸宗においてこれを知らず。聖道・淨土の二門の菩提心においては、所起の56行業既に別なり。能起の菩提心、何ぞ差別なからんや。

答ふ。所起の行、不同なりと雖も、心に約すれば、同じく是れ菩提・涅槃を希求すその心體、さらに差別なし。上に出すところの教量のごとし、即ちその証なり。この故に、淨土門の人師、善導・道綽等、皆無上菩提心を以て正因とすと言つて、全く別の體性を出さず。かの解釈の中に説くがごとし。この説を作すと雖も、諸宗の解釈に淺深不同あり。かの教文を執する人、定めて異義を存することあらんか。もし不同の文あらば、是れ淺探の不同とす、體性に差異あるにあらず。既に法無我平等の心と云ふ。何の大乘宗か、法我不平等の義を立てんや。まさに知るべし、諸宗の淺深は、即ちこの無我義の淺探差別なり。これを思ふべし。

問ひて曰く、もし淺深の異ありと許さば、既に不同の義を成ず。何ぞ一體と云ふや。答ふ。譬へば、海水一味なりと雖も、淺探不同あるがごとし。菩提心の體は、一味の水のごとし。行相の差別は、淺深不同なるがごとし。もし教文の淺深によつて差異ありと執せば、諸教の仏果も、淺探差別せり。仏果の體において差別ありとやせんや。もしこれ爾らずと言はば、彼もまた同ずべし。是のごときの義理、具に出すに違あらず。たとひもし菩提心の體、諸教において實に差別ありと執せば、すべからず淨土宗において別の菩提心を立て、往生の正因とすべし。しかるに、かの集の中に、觀經の發菩提心の文を釈するに、諸教の菩提心の名字を拳ぐと雖も、正しく往生の正因を出す時は、反つてこれを撥遣せり。兩関に微定するに、さらにその謂なきなり。

57問ふ。かの集の中に捨つるところは、走れ菩提心によつて起すところの諸行なり。是を以てかの集の処処に菩提心行と云ふ。ただし処処に直に菩提心と云ふことあるは、是れ能發の因を挙げて、所發の行を取るなり。しからば、何の過あらんや。答ふ。然らず。まづかの集に選択念仏の義を出す中に云く、「第十八の念仏往生の

之土、或有以持戒為往生之土。〔此次出忍辱精進禪定三行。今略之。〕或有以般若（信等第一義是也）為往生之土、或有以善提心為往生之土。〔此次出六念持經持呪三行。今略之。〕或有以起立塔像飯食沙門及以孝養父母奉事師長等種種之行各為往生之國土等、或有專稱其國仏名為往生之土。〔已上集文。〕於此集文、本文広多故、私加註中間文略之。於一諸行、皆上有或有以之三字、下有為往生之土之大字。各配當一行一可見之。既列諸行之外、別出善提心為一行。豈非取心體乎。又処処名善提心等余行、不云布施等余行。況彼集付属名号章中、出聖道淨土諸教善提心、皆撥遣之。全不限所起諸行也。是故彼集或処雖有云善提心行、又或処有直云善提心。是知彼集所言善提心行者、是即指善提心為一行也。善提心即行也。非謂為善提心之行也。此過相処吐言。文相無隱。臨正文可見也。善提心名相分別向下列可引成之。今為汝知善提心行相決択無礙故、先略示綱要而已。

*313下

次正就選択集文可成決断。先此中所破者、如前說。彼講經日所出二大過也。所謂撥去善提心大過、以聖道門譬群賊大過也。於中就第一過、引汝集五段文破之。今初引一段文之次、為令知集文前後、今引一枚余文。於中正所破者、第十八念仏往生願中捨善提心之文是也。今雖為傍論、発就同文故来文、須辨定二百一十億仏刹淨穢義。

問曰、所言二百一十億仏刹者、為唯說淨土乎、亦為通說穢土乎。答。諸師異說云云。玄一師云、言人天之善惡者、明土之因。此中穢土之因説名為惡、淨土之因説名為善。非謂三性中善不善也。又説三性中善性名之為善、不善性名為惡。言国土之粗妙者、明土之果。此中穢土名之為粗、淨土名

願とは、かの諸仏土の中において、或いは布施を以て往生の行とするの土あり、或いは持戒を以て往生の行とするの土あり。〔この次に忍辱・精進・禪定の三行を出す。今これを略す。〕或いは般若を以て〔第一義を信する等是れなり〕、往生の行とするの土あり、或いは善提心を以て往生の行とするの土あり。〔この次に六念・持經・持呪の三行を出す。今これを略す。〕或いは起立塔像・飯食沙門および孝養父母・奉事師長等の種種の行を以て、おのおのの往生の行とするの國土等あり、或いは専らその國の仏名を稱して、往生の行とするの土あり。〔已上、集の文。〕この集の文において、本文広多なるが故に、私に註を加へて、中間の文、これを略せり。一一の諸行において、皆上に「或有以」の三字あり、下に「為往生之土」の六字あり。おのおの一行に配当してこれを見るべし。既に諸行を列するの外に、別に善提心を出して一行とせり。あに心体を取るにあらずや。また処処に善提心等の余行と名づく、布施等の余行と云はず。況んやかの集の付属名号章の中に、聖道・淨土の諸教の善提心を出して、皆これを撥遣せり。全く所起の諸行に限らざるなり。この故にかの集の或る処に善提心行と云ふことありと雖も、また或る処に直に善提心と云ふあり。是に知りぬ、かの集に言ふところの善提心行とは、是れ即ち善提心58心を指して一行とするなり。善提心即ち行なり。善提心が行とすと謂ふとはあらざるなり。この過相は、処処に言を吐けり。文相隠れなし。正文に臨んで見るべきなり。善提心の名相分別は、下に向つてこれを引き成すべし。今汝をして善提心の行相を知らしめて、決択無礙ならんがための故に、まづ略して綱要を示すのみ。

次に正しく選択集の文について決断を成すべし。まづこの中に破するところは、前に説くがごとし。かの講經の日、出すところの二つの大過なり。いはゆる善提心を撥去する大過、聖道門を以て群賊に譬ふる大過なり。中において第一の過について、汝が集の五段の文を引いてこれを破す。今初めに一段の文を引くのに、集の文の前後を知らしめんがために、今一枚余の文を引く。中において正しく破するところは、第十八の念仏往生の願の中の善提心を捨つるの文、是れなり。今傍論たりと雖も、まづ同文故来の文について、すべからく二百一十億の仏刹淨穢の義を弁定すべし。

問ひて曰く、言ふところの二百一十億の仏刹とは、ただ淨土を説くとやせんや、また通じて穢土を説くとやせんや。

答ふ。諸師の異説云云たり。玄一師の云く、「人天の善惡と言ふは、土の因を明かす。この中に、穢土の因を説いて名づけて惡とす、淨土の因を説いて名づけて善とす。三性の中の善不善なりと謂ふとはあらず。また三性が中の善性を説いてこれを名づ

レ妙。又説二惠趣二名レ粗、善趣名レ妙。〔粗与麤字音実無別〕解曰、依二此師意、言二百一十億仏利等者、通為レ説淨穢因果。如レ文可レ知。又法位法師云、言即為広説二百一十億諸仏利土二者、令二其依レ相奉順修行。善惡粗妙等者、明下土随二物感、精麤不レ等云云。解曰、此。积之言、淨穢分別雖レ不レ分明、觀二前後大意、是唯為レ説淨土二也。何者此解釈文次云、其中玄義三門分別。一积名、二出体、三諸門分別。第一积一名者、淨者離穢為レ義、土者所居為レ義也。第二出体者、淨土二種。一变化淨土、二受用淨土。乃至第三諸門分別中有二六門。一色相、二分量、三漏無漏、四因、五遊路、六乘門。色相者、七宝莊嚴為二形色、放二大光明為二顯色。分量者、自利土其量無際、利他土無レ定。第三漏無漏分別中、無漏義約二如來。如レ文可レ知。有漏者、以二十地已還菩薩第八識所變淨土、是有漏識相分撰二故。有漏身所依処故、為二妙有漏苦諦所撰二也云云。〔取意略抄〕解曰、觀二此文、依二仏地論二作二此説。然彼論第一、解地上菩薩淨土漏無漏義、有三家説。一無漏、二有漏、三通二漏無漏。〔即是論主自義、評家義也。〕此疏文出第二家義也。既解二有漏義、尚不レ出二穢土。知前惣釈文、唯限二淨土二也。又此疏上文引二大論二云、仏將法蔵示二諸淨土令二自選取也。文。准二疏下文、引二此文意、亦唯為レ説二淨土二也。不レ可レ云雖レ説淨穢二土二応法蔵比丘心願二故、唯出二淨土一分也。〔玄一師积二応其心願悉現与之經文、有二義。第二義云、又説雖二通見二土、発心の由唯是淨土、是故偏説。文。不レ可レ例二此義也。可レ知。〕依二此积意、不レ可レ云通二淨穢一也。然者言明土随物感精麤不等者、其精者名二善妙、其麤者名二惡粗二也。全非レ謂下於二淨土中二有二惡不善法上也。

問曰、此師意、既云二百一十億仏利皆説淨土、而云下於淨土

*333上

けて善とす、不善性をば名づけて悪とす。国土の粗妙と言ふは、土の果を明かす。この中に、穢土、これを名づけて粗とす、淨土を妙と名づく。また惡趣を説いて粗と名づく、善趣を妙と名づく。〔粗と麤の字音実に別なし。〕解して曰く、この師の意によるに、二百一十億の仏利等と言ふは、通じて淨穢の因果を説くとす。文のごとく知りぬべし。また法位法師の云く、二即為広説二百一十億諸仏利土」と言ふは、それをして相によつて奉順修行せしむ。善惡粗妙等とは、土、物の感に随つて精麤等しからざることを明かす」と云云。解して曰く、この解釈の言は、淨穢の分別、分明ならずと雖も、前後の大意を觀するに、是れただ淨土を説くとするなり。何とならば、この解釈の文の次に云く、「その中の玄義、三門に分別す。一に积名、二に出体、三に諸門分別。第一に名を积せば、淨とは離穢を義とす、土とは所居を義とするなり。第二に体を出さば、淨土に二種あり。一变化淨土、二受用淨土なり。乃至第三の諸門分別の中に六門あり。一色相、二分量、三漏無漏、四因、五遊路、六乘門。色相とは、七宝莊嚴を形色とす、大光明を放つを顯色とす。分量とは、自利の土はその量無際、利他の土は定まりなし。第三に漏無漏分別の中に、無漏の義は如來に約す。文のごとく知るべし。有漏とは、十地已還の菩薩、第八識所變の淨土、是れ有漏識相分の撰なるを以ての故に。有漏身の所依処なるが故に、妙有漏苦諦の所撰とするなり」と云云。〔取意、略抄〕解して曰く、この文を觀るに、仏地論によつてこの説を作す。しかるにかの論の第一に、地上の菩薩の淨土の漏無漏の義を解するに、三家の説あり。一は無漏、二は有漏、三は漏無漏に通ず。〔即ち是れ論主の自義、評家の義なり。〕この疏の文には、第二家の義を出すなり。既に有漏の義を解するに、尚し穢土を出さず。知りぬ、前の惣釈の文は、ただ淨土に限るなり。またこの疏の上の文に、大論を引いて云く、「仏、法蔵をして諸の淨土を示して自ら選取せしめんとするなり。」文。疏の下の文に准するに、この文を引く意は、またただ淨土を説かんとするなり。淨穢二土を説くと雖も、法蔵比丘の心願に應ずるが故に、ただ淨土の一分を出すと云ふべからざるなり。〔玄一師、「応其心願、悉現与之」の經文を釈するに、二義あり。第二義に云く、「また説く、通じて二土を見ると雖も、発心の由はただに是れ淨土、この故に偏に説く。」文。この義に例すべからざるなり。知るべし。〕この积の意によるに、淨穢に通ずと云ふべからざるなり。しからば、「言明土随物感精麤不等」とは、その精なるをば、善妙と名づく、その麤なるをば、惡粗と名づくるなり。全く淨土の中において惡不善の法ありと謂ふとはあらざるなり。

問ひて曰く、この師の意、既に二百一十億の仏利、皆淨土を説くと云つて、しかも

中有善惡麤妙。何以得無惡不善法乎。答。疏漏無漏分別門正文云、第二約菩薩者、十地菩薩自心所變淨土、由第八識所變淨土是有漏識相分撰、故、是有漏身所依處故、以十地已還阿賴耶識是有漏無記性撰、所變淨土不得無漏。是妙有漏苦諦所撰也等云云。解曰、既解有漏義、判云妙有漏苦諦所撰。明知無有惡不善法也。今問汝曰、先就三惡趣淨土、於上來兩說中、汝為存何義乎。汝答曰、同後師義也。是故汝所引我集文、引大阿彌陀經文、積云、此中選取者、即是取捨義也。謂於二百一十億諸淨土中、捨人天之惡、取人天之善、捨國土之醜、取國土之好也。大阿彌陀經選取義如是云云。是故我之所成立二百一十億淨土者、是唯為淨土、不通過穢土也。

*233下

問曰、然者就人天之善惡經文、為於淨土中有惡不善法乎。如何。若云有之者、於三界中、上二界猶離惡心不善法。唯欲界有惡法。若云有惡者、就何聖教文、指何淨土乎。若汝答曰、如法位師所解、精麤相對云善惡者、難曰、不然、汝之集文出四十八願選取義中云、第一無三惡趣願者、於所覩見之二百一十億土中、或有有下三惡趣之國土、或有無三惡趣之國土。即選捨其有三惡趣麤惡國土、選取其無三惡趣善妙國土故、云選取也。第二不更惡趣願者、於彼諸淨土中、或有縱雖國中無三惡道、其國人天壽終之後、從其國去復更三惡趣之土、或有下不更惡道之土。即選捨其更惡道麤惡國土、選取其不更惡道善妙國土故、云選取也云云。汝之集文物標處、既云二百一十億諸淨土。別積處作此說。明知如汝所計者、於淨土中有三惡趣。又從淨土沒墮三惡趣中也。此一事不足引文証立破。夫淨土諸境皆善業所成。是故見色聞香、皆增法樂。何況有三惡趣乎。設雖有初生退位菩薩、與深位聖衆

*234上

淨土の中において善惡麤妙ありと云ふ。何を以てか惡不善の法なしとは知ることを得るや。

答ふ。疏の漏無漏分別門の正文に云く、「第二に菩薩に約せば、十地の菩薩、自心所變の淨土は、第八識所變の淨土にして、是れ有漏識相分の撰なるによるが故に、是れ有漏身の所依處なるが故に、十地已還の阿賴耶識、是れ有漏無記性の撰なるを以て、所變の淨土、無漏なることを得ず。是れ妙有漏苦諦の所撰なり」等と云云。解して曰く、既に有漏の義を解するに、判じて妙有漏苦諦の所撰と云ふ。明らかに知りぬ、惡不善の法あることなきなり。

61今汝に問ひて曰く、まづは仏淨穢の義について、上來兩說の中において、汝いづれの義を存すとかせんや。汝答へて曰く、「後の師の義に同ずるなり。この故に、汝が引くところのわが集の文に、大阿彌陀經の文を引いて積して云く、「この中に、選取とは、即ち是れ取捨の義なり。謂く、二百一十億の諸淨土の中において、人天之善を捨てて、人天之善を取る、國土の醜を捨てて、國土の好を取るなり。大阿彌陀經の選取の義、是のごとし」と云云。この故にわが成立するところの二百一十億の淨土とは、是れただ淨土とす、穢土には通ぜざるなり。」

問ひて曰く、しからば、「人天之善惡」の經文について、淨土の中において惡不善の法ありとやせんや。如何ぞ。もしこれありと云はば、三界の中において、上二界猶し惡不善の法を離る。ただ欲界にのみ惡法あり。もし惡ありと云はば、いかなる聖教の文について、何の淨土をか指すや。もし汝答へて、法位師の所解のごとく、精麤相對して善惡と云ふと曰はば、難じて曰く、然らず、汝が集の文に四十八願選取の義を出す中に云く、「第一の無三惡趣の願とは、覩見するところの二百一十億の土の中において、或いは三惡趣あるの國土あり、或いは三惡趣なきの國土あり。即ちその三惡趣ある麤惡の國土を選捨して、その惡趣なき善妙の國土を選取るが故に、選取と云ふなり。第二に不更惡趣の願とは、かの諸淨土の中において、或いはたとひ國中に三惡道なしと雖も、その國の人天壽終つての後、その國より去つてまた三惡趣に更るの土あり、或いは惡道に更らざるの土あり。即ちその惡道に更る麤惡の國土を選捨して、62その惡道に更らざる善妙の國土を選取るが故に、選取と云ふなり」と云云。

汝が集の文に物標する處に、既に二百一十億の諸淨土と云ふ。別積する處にこの説を作す。明らかに知りぬ、汝が所計のごとくは、淨土の中において三惡趣あり。また淨土より没して、三惡趣の中に墮するなり。この一事は、文証を引いて立破するに

俱會、尚依二處不退義、無二退理。終必悟二無生。何況更三惡趣乎。若然者何与二娑婆穢土有不同乎。若無二不同者、豈可判二有漏淨土為二妙有漏苦諦所撰乎。若汝轉言曰、我同二前師義也。所言二百一十億仏利、可通二淨穢也。然惣標處淨之一字我不置レ之、可レ為二展転書写誤レ者、我檢レ汝之集、數本皆有此字。明知若有下無二淨字之本者、是可レ為二伝写落脱過也。若設雖レ許二比較、汝尚不脱二第二難。何者前所引汝集文云、第二不更惡趣願者、於二彼諸仏土中、或有下縱雖二國中無三惡道、其國人天寿終之後、從二其國去復更三惡趣之土、或有下不更二惡道之土。即選捨其更二惡道二麤惡国土、選取其不更二惡道二善妙国土故、云二選択也。文。若然者、云下國中無三惡道二土者、離二淨土外為何土乎。若汝云取即染淨土者、生二彼土人、即レ染見淨。永無二退理。何云更三惡道乎。若云無二淨字者、雖レ免第一過、猶不脱二第二過也。既云從二淨土没更中穢土惡趣。於二淨土立二惡趣、於レ汝未レ可レ為レ難也。汝作二此邪言、令三所化皆住。大邪見。汝是破二損諸仏淨土大賊也。破二損世間人舍、其過尚不輕。汝破二損諸仏淨土、其過世間無比類。汝吐二胸臆之說、顯二愚情之狂。不可思議不可思議也。

*324下

且止二傍論、応レ辨二正論。先於二汝所出二百一十億仏利中、若云下同二初師義有二淨土有穢土者、於レ中今所出六度菩提心等業因、可レ出二淨土業。何者見二集結文即云、選二捨前布施等諸行、選二取専称仏号故、云二選択也云云。此即取二四十八願中念仏業故、明知出二淨土業也。設同二後師義、二百一十億仏利、皆雖レ言レ為二淨土、此難以可レ同。若爾者、於二諸仏淨土中、以二菩提心不レ為二正因二仏土、為何土耶。夫以二無漏淨識所変二名二淨土。淨識

足らず。夫れ淨土ほ、諸境皆善業の所成なり。この故に、色を見、香を聞くに、皆法樂を増す。いかに況んや三惡趣あらんや。たとひ初生退位の菩薩ありと雖も、深位の聖衆と俱會して、尚し處不退の義によつて、退する理なし。終に必ず無生を悟る。いかに況んや三惡趣に更らんや。もししからば、何ぞ娑婆穢土と不同あらんや。もし不同なくは、あに有漏の淨土を判じて妙有漏苦諦の所撰とすべけんや。もし汝轉言して曰く、「我前師の義に同するなり。言ふところの二百一十億の仏利は、淨穢に通ずべきなり。しかるに惣標するところの淨の一字は、我これを置かず、展転書写の誤とすべし」といへば、我汝が集を檢するに、數本皆この字あり。明らかに知りぬ、もし淨の字なきの本あらば、是れ伝写落脱の過とすべきなり。もしたとひこの救を許すと雖も、汝尚し第二の難を脱れじ。何とならば、前に引くところの汝が集の文に云く、「第二に不更惡趣の願とは、かの諸仏の土において、或いはたとひ國中に三惡道なしと雖も、その国の天人寿終つての後、その国より去つてまた三惡趣に更るの土あり、或いは惡道に更らざるの土あり。即ちその惡道に更る麤惡の国土を選捨して、その惡道に更らざる善妙の国土を選取るが故に、選択と云ふなり。」文。

63もししからば、國中に三惡道なき土と云ふは、淨土を離れて外に、何の土なりとかせんや。もし汝、即染淨の土を取ると云はば、かの土に生ずる人は、染に即して淨を見る。永く退する理なし。何ぞ三惡道に更ると云はんや。もし淨の字なしと云はば、第一の過を免ると雖も、猶し第二の過を脱れざるなり。既に淨土より没して穢土の惡趣に更ると云ふ。淨土において惡趣を立てんこと、汝において未だ難しとすべからず。汝、この邪言を作して、所化をして皆この大邪見に任せしむ。汝は是れ諸仏の淨土を破損する大賊なり。世間の人の舍を破損する、その過尚し輕からず。汝、諸仏の淨土を破損する、その過、世間に比類なし。汝、胸臆の說を吐いて、愚情の狂を顯はす。不可思議不可思議なり。

且く傍論を止めて、まさに正論を弁ずべし。まづ汝が出すところの二百一十億の仏利の中において、もし、初師の義に同じて、淨土あり穢土ありと云はば、中において今出すところの六度・菩提心等の業因は、淨土の業を出すなるべし。何とならば、集の結する文を見るに、即ち云く、「前の布施等の諸行を選捨して、専称仏号を選取るが故に、選択と云ふなり」と云云。これ即ち四十八願の中の念仏業を取るが故に、明らかに知りぬ、淨土の業を出すなり。たとひ後の師の義に同じて、二百一十億の仏利、皆淨土とすと言ふと雖も、この難は以て同じかるべし。もししからば、諸仏の淨

所変故、華池宝閣、有_レ清淨形質。内外俱淨故名_二淨土也。以_二有漏識所変_一為_二穢土_一。有漏識所変故、瓦礫荆棘、無_二清淨光明_一。内外俱穢故、名_二穢土_一。然淨識者、即是菩提心也。故一切淨土以_二菩提心_一為_二正因_一也。探玄記第三引_二撰論_一云、菩薩及如来唯識智為_二淨土体_一。文。唯識智者、即菩提心也。非_二唯為_一淨土正因、以_二菩提心_一亦為_二淨土体_一也。翻_レ此故、有漏識_レ只非_二變_一為_二穢土_一、穢土亦以_二有漏識_一為_レ体。是論家性相也。故諸經論中、出_二淨土正因_一、先勸_二發菩提心_一。何有_レ弥陀一仏背_二三世道同之修因_一、西方一家隔_二一道至果之道理_一乎。是以法蔵比丘說_二光顔巍巍威神無極等頌_一已、白_二世自在王仏言_一、唯然世尊我發_二無上正覺之心_一、願仏為_レ我広宣_二經法_一。我當_レ修行撰_二取仏国_一清_二淨莊_一嚴無量妙土_等云云。《已上双觀經》。此中所_レ言無上正覺心者、即是菩提心也。當_レ知自_レ非_二地上証真行_一、不_レ能_二莊_一嚴仏土。其証真行、非_二菩提心_一、不_レ能_二成立_一。是故法蔵比丘、先稱_二我發無上正覺之心_一、示_二已有_一受法器。如下彼善財對_二知識_一先唱_二我已發菩提心_一也。又依_二悲華經意_一、宝海梵志、勸_二化無諍念王并一千太子等_一、皆令_レ發_二無上菩提心_一。爾時宝蔵如来、入_二不失菩提心三昧_一、放_二大光明_一、遍照_二無量無辺世界_一。皆悉令_二是轉輪聖王及無量衆生等見_一無辺諸仏世界。是時他方大衆、皆來_二集仏所_一。爾時宝海梵志白_二聖王言_一、大王今可_レ先發_二誓願_一取_二妙仏土_一。爾時聖王聞_二是語_一已、白_二仏言_一、世尊、我今_レ真実欲_レ得_二菩提_一。如下我先於三月之中、以_二諸所須_一、供_二養於仏及比丘僧_一、如是善根、我今廻_二向阿耨多羅三藐三菩提_一。終不_レ願_レ取_二不淨仏土_一。世尊、我今發_レ願。令_二我成_一阿耨多羅三藐三菩提時、世界之中無_レ有_二地獄畜生餓鬼_一、一切衆生命終之後、令_レ不_レ墮_二於_一三惡道中_一。乃至広説_二大願_一。《取意略鈔》。此中所_レ言聖王者、是阿弥陀如来因位也。依_二玄法師寂法師意_一、宝蔵仏世自在王仏は別仏也。弥陀如来宝蔵仏時、最初發心、修_二嚴淨仏国行_一。後時值_二世自在王仏_一、亦深修_二淨土之行_一。爾者聖王修_二淨土行_一、先發_二菩提心_一為_レ因。如来証_二成淨土行_一、亦入_二不失菩提心三昧_一為_レ縁。當_レ知所依三昧是法体隨_一也。明知淨土因果皆菩提心為_レ体。若不_レ爾者、淨土不_レ可_二

*355上

土の中において、菩提心を以て正因とせざる仏土は、何の土なりとかせんや。夫れ無漏淨識の所変を以ては淨土と名づく。淨識の所変なるが故に、華池宝閣、清淨の形質64あり。内外俱淨なるが故に、淨土と名づくるなり。有漏識の所変を以ては穢土とす。有漏識の所変なるが故に、瓦礫荆棘、清淨の光明なし。内外俱穢の故に、穢土と名づく。しかるに淨識とは、即ち是れ菩提心なり。故に一切の淨土、菩提心を以て正因とするなり。探玄記の第三に撰論を引いて云く、「菩薩および如来の唯識智を淨土の体とす。」文。唯識智とは、即ち菩提心なり。ただ淨土の正因とするのみにあらず、菩提心を以て、また淨土の体とするなり。これに翻するが故に、有漏識は、ただ穢土を變為するのみにあらず、穢土はまた有漏識を以て体とす。是れ論家の性相なり。故に諸經論の中に、淨土の正因を出すに、まづ發菩提心を勧めたり。何ぞ、弥陀一仏、三世道同の修因を背き、西方一家、一道至果の道理を隔つることあらんや。是を以て法蔵比丘、「光顔巍巍威神無極」等の頌を説き已つて、世自在王仏に白して言く、「ただ然り、世尊、我無上正覺の心を發せり、願はくほ、仏、わがために、広く經法を宣べたまへ。我まさに修行して仏国を撰取し、無量の妙土を清淨莊嚴すべし」等と云云。《已上、双觀經》。この中に言ふところの無上正覺心とは、即ち是れ菩提心なり。まさに知るべし、地上証眞の行にあらざるよりは、仏土を莊嚴すること能はず。その証眞の行は、菩提心にあらざれば、成立すること能はず。この故に、法蔵比丘、まづ「我發無上正覺之心」と稱して、已に受法の器あることを示す。かの善財、知識に対して、まづ「我已發菩提心」と唱ふるがごときなり。

また悲華經の意によるに、宝海梵志、無諍念王ならびに一千太子等を勸化して、皆65無上菩提心を發さしむ。爾時に、宝蔵如来、不失菩提心三昧に入つて、大光明を放つて、遍く無量無辺の世界を照す。皆ことごとくこの轉輪聖王および無量の衆生等をして、無辺の諸仏世界を見せしむ。この時に、他方の大衆、皆仏所に來集す。爾時に、宝海梵志、聖王に白して言く、「大王、今まづ誓願を發して妙仏土を取るべし。」爾時に、聖王、この語を聞き已つて、仏に白して言く、「世尊、我今、真実に菩提を得んと欲ふ。我、先に三月の中において、諸の所須を以て、仏および比丘僧に供養するがごときの、是のごときの善根を、我今、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。終に不淨の仏土を取らんと願せず。世尊、我今、願を發す。我をして阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめん時、世界の中に地獄・畜生・餓鬼あることなく、一切の衆生、命終の後に、三惡道の中に墮せざらしめん。」乃至、広く大願を説く。《取意、略鈔》。この中に言ふところの聖

成立。三身妙果、亦不能成就。是以華嚴撮要云、若廢文殊存普賢、所有行門屬有漏。文。解曰、文殊是菩提主、即是大智也。普賢是涅槃主、即是真理也。然真如理中、染淨不殊、鎔融合撰。不壞不變義、而隨緣生三万法。若見有漏法時、拳体皆是為有漏法。然始覺菩提心生、初信真如。〈十信也〉。種姓漸顯發、〈十住也〉。起稱理行。〈十行也〉。此行流至三處、〈十廻向也〉。終証真如。〈十地也〉。証道円満到仏果。果徳尊高、終不堪栖凡界。無漏淨識、為之變為淨刹。仏果依正、是得成立。此依報名淨土。是故論家判淨土体云、最極自在淨識為相。仏無漏心以為体相云云。當知淨識乃至無漏心者、是菩提心也。是故初心行者、亦以菩提心為正因得往生。若離此義、一切皆為穢土、更無淨土。何者謂菩提心、於一味真如隨縁法中、撰取淨分為依報。若無此心、不成立淨土。

問。設念仏行者雖無菩提心、阿彌陀如来從本建立淨土。何淨刹不立乎。答。諸仏修道儀式、彼此無差別。行者若以菩提心不為正因、彌陀亦可同。若爾者、淨土不成立。就中汝集奥文云、上輩之中、雖說菩提心等余行、望上本願、意在衆生專稱彌陀仏名。而本願中更無余行云云。以知汝云言彌陀本願中無菩提心。若然者、彌陀如来何嚴淨仏国乎。

問曰、我云彌陀本願中無菩提心者、所化衆生往生淨土業中、

*35下

王とは、是れ阿彌陀如来の因位なり。玄法師・寂法師の意によるに、宝蔵仏、世自在王仏、是れ別仏なり。彌陀如来、宝蔵仏の時、最初に発心して、嚴淨仏国の行を修す。後時に世自在王仏に値ひて、また深く淨土の行を修す。しからば、聖王、淨土の行を修するに、まづ菩提心を發して因とす。如来、淨土の行を証成するに、また不失菩提心三昧に入つて縁となる。まさに知るべし、所依の三昧は、是れ法体の随一なり。

明らかに知りぬ、淨土は因果皆菩提心を体とすといふことを。もししからずは、淨土、成立すべからず。三身の妙果、また成就すること能はざらん。是を以て、華嚴撮要に云く、「もし文殊を廢して普賢を存せば、所有の行門、有漏に属せん。」文。解して66曰く、文殊は是れ菩提の主、即ち是れ大智なり。普賢は是れ涅槃の主、即ち是れ真理なり。しかるに真如の理の中には、染淨殊ならず、鎔融合撰せり。不變の義を壞せずして、隨縁して方法を生ず。もし有漏の法と見る時は、拳体皆是れ有漏の法とす。しかるに始覺の菩提心生じて、初めて真如を信ず。〈十信なり〉。種姓漸く顯發して〈十住なり〉、稱理の行を起す。〈十行なり〉。この行、三處に流至して〈十廻向なり〉、終に真如を証す。〈十地なり〉。証道円満して仏巢に到る。果徳尊高にして、終に凡界に栖むに堪へず。無漏淨識、これがために淨刹を變為す。仏巢の依正、是に成立することを得。この依報を淨土と名づく。この故に、論家、淨土の体を判じて云く、「最極自在淨識を相とす。仏の無漏心を以て体相とす」と云云。まさに知るべし、淨識、乃至無漏心とは、是れ菩提心なり。この故に、初心の行者、また菩提心を以て正因として往生することを得。もしこの義を離れては、一切皆穢土たらん、さらに淨土なからん。何とならば、謂く、菩提心、一味の真如隨縁の法において、淨分を撰取して依報とす。もしこの心なくは、淨土を成立せざらん。

問ふ。たとひ念仏の行者、菩提心なしと雖も、阿彌陀如来、本より淨土を建立せり。何ぞ淨刹立せざらんや。

答ふ。諸仏修道の儀式、彼此差別なし。行者もし菩提心を以て正因とせずは、彌陀もまた同じかるべし。もししからば、淨土、成立せざらん。なかんづくに、汝が集の奥の文に云く、「上輩の中に、菩提心等の余行を説くと雖も、上の本願に望むるに、67意は衆生をして専ら彌陀仏の名を稱せしむるに在り。しかも本願の中には、さらに余行なし」と云云。以て知りぬ、汝は彌陀の本願の中に菩提心なしと言ふことを。もししからば、彌陀如来、何ぞ仏国を嚴淨せんや。

問ひて曰く、我、彌陀の本願の中に菩提心なしと云ふは、所化の衆生、往生淨土の

言_レ以_レ菩提心_二不_レ為_二正因也。非_レ謂_下於_レ弥陀如来因位_一、自無_中菩提心_上。何致_二此噴_一乎。答。一切諸仏勸_二發菩提心_一者、我依_二菩提心_一成_二正覺_一故、衆生亦無_二菩提心_一者、不_レ可_二成仏_一故也。若云_二弥陀利生本願中無_二菩提心_一者、自因位亦不_レ可_レ有_二菩提心_一。汝盛成_二立此義_一也。是以汝集與文云、此經雖_レ有_二菩提心之言_一、未_レ說_二菩提心之行相_一。文。汝指_二双觀經_一作_二此說_一。然此經中說_二四十八願_一以_二菩提心_一名_レ願者、自他宗盛談也。〔此立破如_二第四門_一〕。然汝云_レ不_レ說_二菩提心_一。以知如_二汝所計_一者、西方宗能化所化俱亡_一菩提心_一乎。爾者弥陀不_レ可_レ成_二正覺_一、不_レ可_レ嚴_二淨土_一也。〔問曰、彼集意、立_二聖道門淨土門_一二種菩提心_一、捨_二聖道菩提心_一、非_レ取_二淨土菩提心_一乎、如何。答。設雖_レ分_二二種_一、無_二其理_一也。然如_二前菩提心辨定門說_一。彼集付屬名号章中、雖_レ出_二諸教菩提心_一、還撥_二去_一之。出_二其名字_一者、為_レ捨_二之也、非_レ為_レ取_二之也。其立破至_二第五門_一可_レ悉_レ之。凡其上四章、破_二彼集四過_一之次、少_レ述_二諸門大綱_一也。得_二此意_一可_レ見_レ之。〕又設弥陀雖_レ設_二淨利_一、汝誹_二撥菩提心_一者、不_レ感_二得往生_一。如_二群疑論云_一。地前菩薩聲聞凡夫、未_レ証_二遍滿真如_一、未_レ斷_二人法_一二執、識心麤劣、所變淨土、不_レ可_レ同_二於地上諸大菩薩微細智心所變微妙受用淨土_一。然以_二阿弥陀殊勝本願増上縁力_一、令_下彼地前諸小行菩薩等、識心雖_レ劣、依_二託如来本願勝力_一、還能同_二彼地上菩薩所變淨土微妙広大清淨莊嚴_一、亦得_レ見_レ故、名_レ生_二他受用土_一云云。解曰、此中所_レ出_二凡聖二衆麤心_一、既云_二變_レ為_二淨土_一。當_レ知是隨_二其所応_一起_二大小菩提心_一、此心變_レ為_二淨土_一也。然汝誹_二撥菩提心_一、何變_レ為_二淨土_一乎。若不_レ變_レ為_二者、何得_二往生_一乎。

*326上

問。如_二比論下文云_一、中品三人無_二菩提心_一故、仏不_レ來迎_二云云。今何云_レ有_二菩提心_一乎。答。下文云、不_レ發_二無上大菩提心_一、不_レ簡_二

業の中に、菩提心を以て正因とせずと言ふなり。弥陀如来の因位において、自ら菩提心なしと謂ふとはあらず。何ぞこの噴を致すや。

答ふ。一切の諸仏、發菩提心を勧むることは、我、菩提心によつて正覺を成ずるが故に、衆生もまた菩提心なくは、成仏すべからざるが故なり。もし弥陀利生の本願の中に菩提心なしと云はば、自ら因位にもまた菩提心あるべからず。汝、盛んにこの義を成立するなり。是を以て、汝が集の奥の文に云く、「この經には、菩提心の言ありと雖も、未だ菩提心の行相を説かず。」文。汝、双觀經を指して、この説を作す。しかるにこの經の中に、四十八願を説く。菩提心を以て願と名づくとは、自他宗の盛談なり。〔この立破、第四門のごとし。〕しかるに、汝、菩提心を説かずと云ふ。以て知りぬ、汝が所計のごときは、西方宗は、能化・所化俱に菩提心を亡ずといふことを。しからば、弥陀も正覺を成ずべからず、仏國を嚴淨すべからざるなり。

〔問ひて曰く、かの集の意は、聖道門・淨土門の二種の菩提心を立て、聖道の菩提心を捨て、淨土の菩提心を取るにあらずや、如何。〕

答ふ。たとひ二種を分つと雖も、その理なきなり。しかるに前の菩提心弁定門に説くのごとし。かの集の68付屬名号章の中に、諸教の菩提心を出すと雖も、還つてこれを撥去す。その名字を出すことは、これを捨てんがためなり、これを取らんがためにあらざるなり。その立破、第五門に至つて、これを悉すべし。およそその上の四章は、かの集の四過を破するの次、少々に諸門の大綱を述ぶるなり。この意を得、これを見るべし。

またたとひ弥陀、淨利を説くと雖も、汝、菩提心を誹撥せば、往生を感得せざらん。群疑論に云ふがごとし。「地前の菩薩・聲聞・凡夫、未だ遍滿真如を証せず、未だ人法二執を断ぜず、識心麤劣にして、所變の淨土、地上の諸大菩薩、微細智心所變の微妙受用の淨土に同ずべからず。しかるに阿弥陀仏の殊勝本願増上縁の力を以て、かの地前の諸小行の菩薩等をして、識心劣なりと雖も、如来の本願勝力に依託して、還つて能くかの地上の菩薩所變の淨土の微妙広大清淨莊嚴に同じて、また見ることを得しむるが故に、他受用の土に生ずと名づく」と云云。解して曰く、この中に出すところの凡聖二衆の麤心、既に淨土を變為すと云ふ。まさに知るべし、是れその所應に随つて大小の菩提心を起す、この心、淨土を變為するなり。しかるに汝は菩提心を誹撥す、何ぞ淨土を變為せんや。もし變為せずは、何ぞ往生を得んや。

問ふ。この論の下の文に云ふがごとく、中品の三人、菩提心なきが故に、仏來迎せずと云云。今何ぞ菩提心ありと云ふや。

小乗菩提心也。此文如第二門引釈、至彼可知。依之諸樂往生淨土二人、皆以菩提心可為正因也。是以四十八願中、処処又有發菩提心之言。汝所引第十八願中云、至心信樂欲生我國云云。明知內心是正因也。往生之業、非唯限口稱也。設深解菩提心行相時、雖言至心信樂之文非必菩提心、若口稱之外取內心者、以內心可為正因。口稱即是助業也。於內心有淺深差別。應以淺為末以深為本。其深者、即是可菩提心也。然者菩提心、最可為淨土正因。是故迦才淨土論、解彌勒所問經所說十念中非凡夫念不雜結使念文云、凡夫念者、若不發菩提心、求出三界作佛、而直爾但念佛求生者、是凡夫念、不得生也。故皆須發菩提心也。不雜結使念者、唯須一心相續觀佛相好。而若口念佛心緣五欲者、是雜結使念也。佛是淳淨心、與結使相違也。《已上》又元曉遊心安樂道出往生因中云、上輩之中說有五句。一者捨家棄欲而作沙門。此顯反起正因方便。二者發菩提心。是明正因。三者專念彼佛。是明修觀。四者作諸功德。是明起行。此觀及行、即為助業。五者願生彼國。此一願、前四行。行願和合乃得生故。《乃至、下文多以菩提心為正因、可見之。》解曰、此文意、專念彼佛非口稱、此取觀想也。以稱名可屬第四起行中。

問。善導和尚意、以稱名名念仏。此処処解釈也。又觀經疏立正雜二行中、於正行中、以稱名為正業、以余禮拜等善為助業。以正助二行已外自余諸善名雜行。此中非唯以稱名為念仏、又正助二業廢立、大与元曉意不同。凡依善導意、一心專念弥陀名之外、全無正業。是以彼疏云、又就比正中復有二種。一者一心專念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業。順彼佛願故等云云。文理顯然、

答ふ。下の文に云く、「無上大菩提心を發さず、小乗の菩提心を簡ばざるなり。」この文、第二門引釈の如し、彼に至つて知るべし。これによつて諸の往生淨土を樂はん人は、69皆菩提心を以て正因とすべきなり。是を以て、四十八願の中、処処にまた發菩提心の言あり。汝が引くところの第十八願の中に云く、「至心信樂欲生我國」と云云。明らかになりぬ、内心は是れ正因なり。往生の業、ただ口稱に限るにあらざるなり。たとひ深く菩提心の行相を解せん時、至心信樂の文、必ずしも菩提心にあらずと言ふと雖も、もし口稱の外に内心を取らば、内心を以て正因とすべし。口稱は即ち是れ助業なり。内心において浅涙の差別あり。まさに浅を以ては末とし、深を以ては本とすべし。その探きは、即ち是れ菩提心なるべきなり。しからば、菩提心、最も淨土の正因とすべし。この故に、迦才の淨土論に、彌勒所問經所說の十念の中の「非凡夫念、不雜結使念」の文を解して云く、「凡夫念とは、もし、菩提心を發して三界を出でて佛に作らんことを求めずして、しかも直爾にただ念仏して生ずることを求むるは、是れ凡夫念なり、生ずることを得ざるなり。故に皆すべからず菩提心を發すべきなり。不雜結使念とは、ただすべからず一心に相續して佛の相好を觀すべし。しかるに、もし口に念仏すとも心に五欲を緣ぜば、是れ結使を雜する念なり。佛は是れ淳淨の心、結使と相違するなり。」《已上》また元曉の道心安樂道に往生の因を出す中に云く、「上輩の中に説くに五句あり。一は、家を捨てて欲を棄てて沙門と作る。此れは反つて正因を起す方便を顯はす。二は、菩提心を發す。是れは正因を明かす。三は、かの佛を專念す。是れは修觀を明かす。四は、諸の功德を作る。是れは起行を明かす。この觀および行を、即ち助業とす。五は、かの國に生ぜんと願す。この一は是れ願、前の四は是れ行。行70願和合して乃ち生ずることを得るが故に。」《乃至、下の文に多く菩提心を以て正因とす、これを見るべし。》解して曰く、この文の意は、專念彼佛は、口稱にあらず、これ觀想を取るなり。稱名を以ては、第四の起行の中に属すべし。

問ふ。善導和尚の意は、稱名を以て念仏と名づく。これ処処の解釈なり。また觀經の疏に正雜二行を立つる中に、正行の中において、稱名を以て正業とす、余の禮拜等の善を以ては助業とす。正助二行已外の自余の諸善を以ては雜行と名づく。この中に、ただ稱名を以て念仏とするのみにあらず、また正助二業の廢立、大いに元曉の意と同じからず。およそ善導の意によるに、一心專念弥陀名号の外に、全く正業なし。是を以てかの疏に云く、「またこの正の中について、また二種あり。一は一心に弥陀の名号を專念して、行住坐臥に時節の久近を問はず、念念に捨てずは、是れを正定の業と

不_レ可_二孤疑_一。今選_二採集_一、於_二淨土宗中_一、尚不_レ依_二他師_一、唯以_二此一師宗義_一為_二依憑_一。況如_二元曉節等_一者、是聖道門人師也。解_二釋大與_一善導違背。以_レ之為_二証拠_一不_レ可_二來難_一、如何。答。所_レ設難、源以_二顯密經論_一為_二依憑_一。向_レ下漸可_レ成_二其義_一。今因_二義便_一、且引_二一師積也_一。此積亦與_二善導意_一不_レ相違_二也。何者善導作_二正助一業_一者、以_二能起菩提心_一置而不_レ論_レ之、就_二所起諸行_一分_レ別_レ之也。如_レ彼聞_二截打聲_一聞_レ功於_二刀杖_一。仏法諸行皆_レ應_レ讓_レ功於_二菩提心_一。以_二菩提心_一是_レ體、稱名等是_レ業_一故。是故若就_二菩提心_一與_二稱名_一二行上論_レ之時、以_二菩提心_一為_二正業_一事、可_レ理在_二絶言_一。是以_二觀經疏_一第一初云、道俗時衆等各_レ發_二無上心_一。〔此即菩提心也。乃至〕願以_二此功德_一、平等施_二一切_一、同發_二菩提心_一、往_二生安樂國_一。又第四卷終示_二靈相_一勸_二有縁知識_一文云、以_二此功德_一、廻_二施衆生_一、悉發_二菩提心_一、慈心相向等云云。〔余処解釈亦有_二此文_一〕。此中既云_二各發無上心_一、不_レ云_二各稱弥陀仏_一、云_二同發菩提心_一、不_レ云_二同稱弥陀名_一、云_二悉發菩提心_一、不_レ云_二悉稱弥陀名_一。當_レ知菩提心是淨土正因故、惣標_レ出唯_二出_一正_レ因_一也。若不_レ爾者、善導何_レ出_二以_一菩提心_一為_二助業_一耶。苦_レ為_二助業_一者、惣標_レ出_二正_レ因_一時、何_レ舉_二菩提心_一、不_レ出_二稱名_一耶。又壞感云、發菩提心為_二万行之首_一。此学_二念仏三昧_一、為_二万行之次_一。文。此又以_二菩提心_一為_二正_レ因_一也。道綽等_レ積文、不_レ違_二具引_レ之、臨_レ文可_レ見。次善導稱名與_二元曉憶念_一往雖_レ似_二相違_一、始終無_レ差異。何者凡言_レ念者、明記不忘之稱、即在_レ心也。是政言_二念仏_一者、正指_二心念_一之言也。是故觀經、九品往生皆名_レ觀。稱名亦兼_二心念_一故也。法位師_レ積曰、言_二苦_一不_レ能_レ念_レ念_レ無量壽_一者、此明_二唯稱_二名号_一。此能名_レ觀、易_レ成就。言_二具_二足_一十念_一、稱_二仏名_一者、口稱心念、要須_レ滿_二十_一。由_二功德圓滿_一滅_二福生_一故等云云。即此義也。又如_二十住毘婆娑論_一第四、說_二稱名義_一中_一。聞_二是十仏名号_一執持在_レ心云云。又云、稱_レ名一心念、亦得_二不退_一。善導_レ解釋、更不_レ違_二此等意_一。是故觀念法門、出_二念仏三昧法_一、引_二般舟經_一終云、阿彌陀仏_レ報言、欲_二來生_一者、當_レ念_二我名_一。莫_レ有_二休息_一、即得_二來生_一。仏言、專念_二故得_二往生_一。常念_二仏身三十二相_一。〔乃至〕由_レ念_二仏色_一

*377下

名づく。かの仏の願に順ずるが故に」等と云云。文理顯然なり、狐疑すべからず。今の選採集は、淨土宗の中において、尚し他師によらず、ただこの一師の宗義を以て依憑とす。況んや元曉師等のごときは、是れ聖道門の人師なり。解_二釋大いに善導と違背せり_一。これを以て証拠として來難すべからず、如何ぞ。

答ふ。設くるころの難は、源顯密の經論を以て依憑とす。下に向つて漸くその義を成ずべし。今、義便に因んで、且く一師の積を引くなり。この積、また善導の意と相違せざるなり。何とならば、善導、正助二業を作ること、能起の菩提心を以ては、置いてこれを論ぜず、所起の諸行についてこれを分別するなり。かの截打の声を71聞いては、功を刀杖に關_レくるがごとし。仏法の諸行は、皆まさに功を菩提心に讓るべし。菩提心は是れ體、稱名等は是れ業なるを以ての故に。この故に、もし菩提心と稱名との二行について、これを論ぜん時は、菩提心を以て正業とせんこと、理在_二絶言_一なるべし。是を以て、觀經の疏の第一の初に云く、「道俗時衆等のおの無上心を發せ。

〔これ即ち菩提心なり。乃至〕願はくは、この功德を以て、平等に一切に施して、同じく菩提心を發して、安樂國に往生せん。」また第四卷の終りに、靈相を示して有縁の知識を勸むる文に云く、「この功德を以て、衆生に廻施して、ことごとく菩提心を發して、慈心をもて相向はん」等と云云。〔余処の解釈に、またこの文あり。〕

この中に既に「各發無上心」と云ひて、「各稱弥陀仏」と云はず、「同發菩提心」と云ひて、「同稱弥陀名」と云はず、「悉發菩提心」と云ひて、「悉稱弥陀名」と云はず。まさに知るべし、菩提心は是れ淨土の正因なるが故に、惣標する処には、ただ正因を出すなり。もししからずは、善導、何の処にか、菩提心を以て助業とすと積せるや。もし功業とせば、惣標する処に正因を出す時、何ぞ菩提心を挙げて、稱名を出さざるや。また懷感の云く、「發菩提心を万行之首とす。この念仏三昧を学するを、万行之次とす。」文。これまた、菩提心を以て正因とするなり。道綽等の積文、具にこれを引くに違はず、文に臨んで見るべし。

次に善導の稱名と元曉の憶念と、一往相違に似ると雖も、始終、差異なし。何とならば、およそ念と言ふは、明記不忘の稱、即ち心に在るなり。この故に念仏と言ふは、72正しくは心を指すの言なり。この故に觀經に、九品往生皆觀と名づく。稱名もまた心を兼ねるが故なり。法位師_レ積して曰く、「もし念すること能はずは、まさに無量壽仏と稱すべし」と言ふは、これはただ名号を稱することを明かす。これをも能く觀と名づく、成就し易し。十念を具足して仏名を稱すと云ふは、口稱と心念と、要らず

身二故、得是三昧。即善導自註云、已上明念仏三昧法。文。又明入道場念仏三昧法中云、於道場中、晝夜束心、相續專心阿弥陀仏、心与声相続等云云。明知、善導意称名下必兼一心念也。若約具此心念、諸行皆名念。往生論、以三禮拜等名三念門、即此義也。迦才淨土論、名三念口念、又同之。若不爾者、善導所引念仏証拠不成。何者觀經疏第一云、凡言菩提、乃是仏果之名、亦是正報。道理成仏之法、要須三万行円備方乃剋成。豈將念仏一行、即望成者、無有是処。雖言未証、万行之中、是其一行。何以得之知。華嚴經説、功德雲比丘語善財言、我於三昧法三昧海中、唯知一行。所謂念仏三昧。以此文証、豈非一行也云云。(凡不限善導壞感師等、引此文証成念仏義也。)今此所引念仏三昧名字、具名普門光明觀察正念諸仏三昧。(普經) 香象大師釈云、普門者、簡異別門故。謂別門中、或見一方二万一仏二仏等。皆不稱十方。今不依彼故云普門。此門若開、普見十方塵數諸仏。光明者、明所見分明故。觀察者、所見審細故。正念者、見時不乱故。上來是能見、諸仏是所見、三昧是彼見所依定云云。(略抄) 大周經、名憶念一切諸仏境界智慧光明普見法門。貞元經、名憶念諸仏平等境界無礙智慧普見法門。解曰、三訳俱有觀念義。正念并憶念者、是念也。觀察并普見者、是觀也。此中無口稱義也。徳雲比丘迹居因地、得果海苑身徳。恒撰果門為因。如彼普賢文殊等。豈以口稱行為所得解脱門耶。故清涼大師釈此念仏義、束為五種。一縁境正觀念仏門、二攝境唯心念仏門、三心境俱泯念仏門、四心境無礙念仏門、五重重無尽念仏門。融新五門以為一致、即是此中能念之心云云。此即非口稱也。即大師自釈云、称名属口、非真念故、略而不言。文。是故善導和尚、依文殊般若經等、以称名為宗、以三昧為趣、為令得真念故、勸称名也。是故引此等文為証、成念仏之義、更非以一向称名為本不関心念也。

*238上

べからく十に満ずべし。功德円満して罪滅し福生ずるによるが故に」等と云云。即ちこの義なり。また十住毘婆娑論の第四に、称名の義を説く中に云ふがごとし。「この十仏の名号を聞いて、執持して心に在り」と云云。また云く、「名を称し、一心に念ずれば、また不退転を得。」善導の解釈、さらにこれらの意に達せず。この故に、觀念法門に、念仏三昧の法を出すとして、般舟經を引く終りに云く、「阿弥陀仏報じて言く、来生せんと欲はば、まさにわが名を念ずべし。休息あることなかれ、即ち来生することを得ん。仏の言く、専念するが故に往生を得。常に仏身の三十二相を念せよ。(乃至) 仏の色身を念ずるによるが故に、この三昧を得。」即ち善導自ら註して云く、「已上、念仏三昧の法を明かす。」文。また入道場念仏三昧の法を明かす中に云く、「道場の中において、晝夜に心を束ねて、相續して心を阿弥陀仏に専らにして、心と声と相続せよ」等と云云。明らかに知りぬ、善導の意、称名の下に必ず心念を兼ねるなり。

もしこの心念を具するに約しては、諸行を皆念と名づく。往生論に、禮拜等を以て、五念門と名づく、即ちこの義なり。迦才の淨土論に、心念・口念と名づく、またこれに同じ。もし爾らずば、善導引くところの念仏の証拠、成ぜざらん。何とならば觀經73の疏の第一に云く、「およそ菩提と言ふは、乃ち是れ仏果の名、またはれ正報なり。道理として成仏の法は、要すべからく万行円かに備はつてまさに乃ち剋成すべし。あに念仏の一行を將つて、即ち成ずることを望まば、この処あることなけん。未だ証せずと言ふと雖も、万行の中に、是れその一行なり。何を以てか知ることを得る。華嚴經に説く、「功德雲比丘、善財に語つて言く、我、仏法三昧海の中において、ただ一行を知れり。いはゆる念仏三昧なり。」この文を以て証するに、あに一行にあらざる」と云云。(およそ善導・懷感師等に限らず、この文を引き、念仏の義を証成するなり。)今ここに言ふところの念仏三昧の名字、具には「普門光明觀察正念諸仏三昧」と名づく。(普經) 香象大師釈して云く、「普門とは、別門に簡異するが故に。謂く、別門の中には、或いは一方二万一仏二仏等を見る、皆十方に称はず。今彼によらざるが故に普門と云ふ。この門もし開くれば、普く十方塵数の諸仏を見る。光明とは、所見分明なることを明かすが故に。觀察とは、所見審細なるが故に。正念とは、見時に乱せざるが故に。上來は是れ能見、諸仏は是れ所見、三昧は是れかの兄の所依の定なり」と云云。(略抄) 大周經には、「憶念一切諸仏境界智慧光明普見法門」と名づく。貞元經には、「憶念諸仏平等境界無礙智慧普見法門」と名づく。解して曰く、三訳俱に觀念の義あり。正念ならびに憶念とは、是れ念なり。觀察ならびに普見とは、是れ觀なり。この中には、口称の義

問。猶如先說。我本以善導一師宗義為依憑。汝所出者、他宗別門說、更不可依之。善導全不出此五種念仏等義、唯以稱名為先。汝出別解別行文、惑亂稱名一宗。豈非為罪業乎、如何。答。成自宗所立時、若有他師義相違時、依附自師義、不執彼義、是決決常途軌儀也。雖然今本意全非兩宗偏党相論。唯我入念仏宗、以善導道綽等所製為依憑。於此選擇集、設雖有何邪義、若相順善導等義者、何強噴汝乎。然披閱善導積、全無此義。汝任自邪心、贖善導正義。如服藥反成病。唯於汝所製集、療邪謬疵也。是故適所引經論文人師積、唯是為成善導宗義也。設雖為自宗高祖解積、不相順善導雅意、置而不出之。善導引華嚴為証。近代專修女人等多分以為口稱之行。爾者經文不成証也。何者經中比丘自說念仏三昧体用云、善男子、我得自在決定解力。信眼清淨智光照曜。普眼明徹具清淨行。慧眼遍觀一切境界。善巧方便離一切障。以清淨身、普詣十方一切国土、恭敬供養一切諸佛。以信解力常念十方一切諸佛。以惣持力受持十方一切佛法。以智慧眼常見十方一切諸佛云云。是故清涼大師積非口稱。然善導和尚引之為証、成稱名義、往似相違。雖然如前說。善導和尚依文殊般若經等、以稱名為宗、以三昧為趣、為令得真念故、勸稱名也。於比丘所得甚深法界、立念仏三昧

*28下

なきなり。徳雲比丘、迹、因地に居して、果海苑身の徳を得たり。恒に果門を撰して因とす。かの普賢・文殊等のごとし。あに口稱の行を以て、所得の解脱門とせんや。74故に清涼大師、この念仏の義を釈するに、束ねて五種とす。一縁正觀念仏門、二撰境唯心念仏門、三心境俱泯念仏門、四心境無礙念仏門、五重重無尽念仏門。この五門を融して、以て一致とする、即ち走れこの中の能念の心なりと云云。これ即ち口稱にあらざるなり。即ち大師自ら釈して云く、「稱名は口に属す、真念にあらざるが故に、略して言はず。」文。この故に、善導和尚、文殊般若經等によつて、稱名を以て宗とし、三昧を以て趣として、真念を得しめんがための故に、稱名を勧むるなり。この故に、これらの文を引いて証として、念仏の義を成じ、さらに向稱名を以て本として、心に開けざるにはあらざるなり。

問ふ。猶し先に説くがごとし。我、本善導一師の宗義を以て依憑とす。汝が出すところは、他宗別門の説、さらにこれによるべからず。善導、全くこの五種念仏等の義を出さず、ただ稱名を以て先とす。汝、別解別行の文を出して、稱名の一宗を惑乱す。あに罪業となるにあらずや、如何。

答ふ。自宗の所立を成ずる時、もし他師の義、相違することある時は、自師の義に依附して、かの義を執せざる、是れ決決の常途の軌儀なり。然りと雖も、今の本意、全く兩宗偏党の相論にあらず。ただ我も念仏宗に入つて、善導・道綽等の所製を以て、依憑とす。この選擇集において、たとひいかなる邪義ありと雖も、もし善導等の義に相順せば、何ぞ強ちに汝を噴めんや。しかるに善導の積を披閱するに、全くこの義なし。汝、自らの邪心に任せて、善導の正義を贖せり。藥を服して反つて病を成すがごとし。ただ汝が所製の集において、邪謬の疵を療するなり。この故に、たまたま引くところの經論の文・人師の積は、ただ是れ善導の宗義を成ぜんがためなり。たとひ自宗の高祖の解積たりと雖も、善導の雅意に相順せずは、置いてこれを出さず。善導、華嚴を引いて証とす。近代專修の女人等、多分、口稱の行とおもへり。しからば、經文、証拠と成らざるなり。何とならば、經の中に、比丘自ら念仏三昧の体用を説いて云く、「善男子、我、自在決定解力を待たり。信眼清淨にして、智光照曜す。普眼明徹して、清淨の行を具す。慧眼遍く一切の境界を觀ず。善巧方便、一切の障を離れたり。清淨の身を以て、普く十方一切の国土に詣して、一切の諸佛を恭敬供養す。信解力を以て、常に十方一切の諸佛を念ず。惣持力を以て、十方一切の佛法を受持す。智慧眼を以て、常に十方一切の諸佛を見る」と云云。この故に清涼大師、口稱にあらずと釈し

名。今称名同是為念仏善。其称名純熟根本、亦是為三昧善。雖有淺深差別、同是可為一念仏三昧善也。善導既云、雖言未証云云。明知以三昧為趣。若唯限称名者、名字外有何法、可云未証乎。是故善導就種類同、為一念仏三昧。清涼約行相不同、積非口称。約此二門、綺而相存者、兩師互可同、以足為証矣。若兩宗偏党者、豈可設此会釈乎。我詳經文、成善導義。何云惑乱称名人乎。惣称名与億念、往生經亦非無其差別。觀經說下品下生中云、如以此愚人臨命終時、遇善知識種種安慰為說妙法、教令念仏。此人苦逼不遑念仏、善友告言、汝若不念者、応称無量寿仏等云云。善導疏釈云、四明善人安慰教令念仏、五明罪人死苦來逼無由得念仏名。六明善友知苦失念、轉教口称弥陀名号云云。口称与億念差別、經疏証文明白乎。余經亦有此証拠、不能一一出而已。

問。爾者近代女人等、全不知此等義、唯任口唱仏号。如前清涼所釈、是非真念仏云云。爾者可非往生行乎、如何。答。言非真念者、以五種念仏為真、以口称為假。真假相對作如是說、非真妄相對也。爾著真因得真果、假因得假果。所謂五種真念仏果、相容甚深仏境於身中、相見三世常身於梅檀塔中。如彼解脱長者毘瑟胝居士等者、即其類也。如是業用、甚深甚深不可思議不可思議。口称仮因行、臨命終時、往生仏土得不退、於彼土漸得勝進。如觀經等說。然則對此甚深真念、指彼口称行、云非真念也、非謂不得往生也。

*339上

たまへり。しかるに善導和尚、これを引いて証として、称名の義を成ずる、一応相違に似たり。然りと雖も、前に説くがごとし。善導和尚、文殊般若等によつて、称名を以て宗とし、三昧を以て趣とす、真念を得しめんがための故に、称名を勧むるなり。比丘所得の甚深の法界において、念仏三昧の名を立つ。今の称名、同じく是れ念仏善とす。その称名純熟する根本、またはれ三昧善とす。浅深の差別ありと雖も、同じく是れ一の念仏三昧善とすべきなり。善導既に云ふ、「未だ証せずと言ふと雖も」と云云。明らかに知りぬ、三昧を以て趣とすといふことを。もしただ称名に限らば、名字の外にいかなる法あればか、未証と云ふべきや。この故に、善導は、種類同について、一76の念仏三昧とす。清涼は、行相不同に約して、口称にあらざり積したまへり。この二門に約して、綺へて相存せば、兩師、互に同ずべし、以て証とするに足れり。もし兩宗偏党せば、あにこの会釈を設くべけんや。我、經文を詳かにして、善導の義を成ず。何ぞ称名の人を惑乱すと云ふや。惣じて称名と億念と、往生經にもまたその差別なきにあらず。觀經に下品下生を説く中に云く、「此のごときの愚人、命終の時に臨んで、善知識の種種に安慰して、ために妙法を説いて、教へて念仏せしむるに遇はん。この人、苦逼めて念仏に違あらずは、善友告げて言く、汝もし念ずること能はずは、まさに無量寿仏と称すべし」等と云云。善導の疏に釈して云く、「四は、善人、安慰して教へて念仏せしむることを明かす。五は、罪人、死苦來り逼めて仏名を念ずることを得るに由なきことを明かす。六は、善友、念を苦失すと知りて、轉じて口称弥陀の名号を教ふることを明かす」と云云。口称と億念と差別せること、經疏の証文、明白なるをや。余經にまたこの証拠あり、一一に出すに能はざるのみ。

問ふ。しからば、近代の女人等、全くこれらの義を知らず、ただ口に任せて仏号を唱ふ。前の清涼の所釈のごとくならば、是れ真の念仏にあらざると云云。しからば、往生の行にあらざるべしや、如何ぞ。

答ふ。真念にあらざると言ふは、五種念仏を以て真とす、口称を以ては假とす。真假相對して、是のごときの説を作す、真妄相對するにはあらざるなり。しからば、真因は真果を得、假因は假果を得。いはゆる五種真念仏の果は、甚深の仏境を身中に相容77し、三世常身を梅檀塔の中に相見る。かの解脱長者・毘瑟胝居士のごときは、即ちその類なり。是のごときの業用、甚深甚深不可思議不可思議なり。口称の仮因の行は、命終の時に臨んで、仏土に往生して不退を得、かの土にして漸く勝進することを得。觀經等に説くがごとし。しかれば則ち、この甚深の真念に対して、かの口称の行

問。如我等口称者、更不知此義。何立念仏名耶。答。雖無深義、随分非無念義。謂不信仏徳一人、更不可称名号。必信仏有利益徳、称其名号時、雖不念相好法身等、必有愛敬念。此念純熟故、雖無甚深觀解、有毛豎涕泣等事。或有不惜身命等類。皆依此愛敬甚深故也。常途指称名号念仏者、即依此義也。謂称名位必有專念仏心。譬如世人呼人時、必有專念其人之心。此亦如是、口称念想必具足也。雖然兩種相對時、以念心為勝、内門転故、以称名為劣、外門転故。隱劣顯勝、名為念仏也。然者元曉師积言專念彼仏是明修觀者、更与善導积無相違也。

*339下

問。善導意唯以称名為念仏。是故往生礼讚云、又如文殊般若云。明二行三昧、唯勸独処空閑、捨諸乱意、係心一仏、不觀相貌、專称名字。即於念中、得見彼阿弥陀仏及一切仏等。問曰、何故不令作觀、直遣專称名字者、有何意也。答曰、乃由衆生障重境細心麤識颺神飛、觀難成就也。是以大聖悲憐、直勸專称名字。正由称名易故、相続即生。文。如文易知。此豈非明白証拠耶。答。既言識颺神飛、觀難成就、令專称名字。此為令成就念心也。所引文殊般若文云、即於念中、得見彼阿弥陀仏及一切仏等者、由称名必念心成就。於此念中、得見仏也。

問。爾者何故上文云不觀相貌專称名字。答。雖不觀三十二相等、称名位念心自堅住。是以上文云、捨諸乱意係心一仏云。明知善導意不唯限称名。若宗趣分別者、以称名為宗、以三

*330上

を指して、真念にあらずと云ふなり、往生を得ずと謂ふにはあらざるなり。問ふ。我等がとき口称の者は、さらにこの義を知らず。いかんが念仏の名を立つるや。答ふ。深義なしと雖も、随分に念の義なきにあらず。謂く、仏徳を信ぜざる人は、さらに名号を称すべからず。必ず仏に利生の徳ありと信じて、その名号を称する時、相好・法身等を念せずと雖も、必ず愛敬の念あり。この念、純熟するが故に、甚深の觀解なしと雖も、毛豎涕泣等の事あり、或いは身命を惜しまざる等の類あり。皆この愛敬、甚深なるによるが故なり。常途に称名を指して念仏と名づくるは、即ちこの義によるなり。謂く、称名の位に必ず仏を專念する心あり。譬へば、世人の人を呼ぶ時、必ずその人を專念するの心あるがごとし。これまた是のごとし、口称、念想必ず具足するなり。然りと雖も、兩種相對する時は、念心を以ては勝とす、内門転の故に、称名を以ては劣とす、外門転の故に。劣を隠して勝を顯はして、名づけて念仏とするなり。しからば、元曉師の积に、「專念彼仏、是明修觀」と言ふは、さらに善導の积と相違なきなり。

78 問ふ。善導の意は、ただ称名を以て念仏とす。この故に、往生礼讚に云く、「また文殊般若に云ふがごとし。二行三昧を明かさば、ただ勸む、独り空閑に処して、諸の乱意を捨てて、心を一仏に係けて、相貌を觀せずして、専ら名字を称せよ。即ち念の中において、かの阿弥陀仏および一切の仏等を見ることを得ん。」問ひて曰く、何が故ぞ、觀を作さしめずして、直に専ら名字を称せしむるは、何の意かあるや。答へて曰く、乃ち衆生障重くして、境は細に心は麤にして、識颺神飛んで、觀成就し難きによつてなり。是を以て、大聖悲憐して、直に専ら名字を称することを勸む。正しく称名の易きによるが故に、相続して即ち生ず。」文のごとく知り易し。これあに明白の証拠にあらずや。

答ふ。既に「識颺り神飛んで、觀成就し難ければ、名字を專称せしむ」と言ふ。これは念心を成就せしめんがためなり。引くところの文殊般若の文に云く、「即ち念の中において、かの阿弥陀仏および一切の仏等を見ることを得」とは、称名によつて必ず念心成就す。この念の中において、仏を見ることを得るなり。

問ふ。しからば、何が故ぞ、上の文に「不觀相貌、專称名字」と云ふ。答ふ。三十二相等を觀せずと雖も、称名の位に念心自ら堅住す。是を以て上の文に云く、「捨諸乱意、係心一仏」と云ふ。明らかに知りぬ、善導の意は、ただ称名に限ら

味_レ為_レ趣。然三昧有_二淺深_一。聞思相應者、是淺也。修慧相應者、是深也。聞思相應、可_レ在_二稱名位_一。修慧相應、唯是定心也。然念仏三昧名雖_レ通_二二位_一、正以_二修慧相應_一為_レ本。若兼_レ末、初後皆滅也。若言_二唯限_一稱名者、念仏三昧名義、依_レ何立耶。是故善導元曉念仏義、始終全無_二相違_一也。然則如_二元曉_一、以_二菩提心_一為_レ往生淨土正因事、兩師又可_二共同_一、更不_レ可_レ有_二異義_一。同發菩提心等善導、豈非_二此意_一耶。能_レ能_レ思_レ之。念仏三昧定散等委細分別、至_二第五門_一可_レ悉_レ之。

從_レ此第二、破_下言_二弥陀本願中無_二菩提心_一過_上者、集曰、三輩念仏往生之文。

仏告阿難○

私問曰、○一為_下廢_中諸行_上歸_中於念仏_上而說_二諸行者_一、准_地云_二善導觀經疏中_一、上來雖_レ說_レ定散兩門之益、望_レ仏本願、意在_二衆生一向專_レ稱弥陀仏名_一之積意、且解_レ之者、上輩之中、雖_レ說_二菩提心等余行_一、望_レ上本願、意唯在_二衆生專_レ稱弥陀仏名_一。而本願中更無_二余行_一。三輩共依_二上本願_一故、云_二一向專念無量壽仏_一也。○先就_二上輩_一而論_二正助_一者、一向專念無量壽仏者、是正行也、亦是所助也。捨_レ家棄_レ欲而作_二沙門_一、發_二菩提心_一等者、是助行也、亦是能助也。謂_レ往生之業念仏為_レ本故、為_二一向修_レ念仏_一、捨_レ家棄_レ欲而作_二沙門_一、又發_二菩提心_一等。就_レ中出家發心等者、且指_二初出及以初發_一。念仏是長時不退之行、寧容_二妨_レ礙念仏_一也云云。(已上集文。)

*30下

決曰、觀經疏言_二上來雖說_一(乃至)一向專稱弥陀仏名等者、此解釈委細料簡、至_二第五門_一可_レ悉_レ之。今且就_二大綱_一言之者、念仏三昧唯非_二觀經所說_一、諸教多所_レ讚。況往生一門、是行最為_二親因_一。其三昧義、如_二上成_レ之。三福等散善不_レ如_二定善_一。日想等觀是念仏三昧眷屬也。然發_二得_レ此念仏三昧_一一方、在_二于一向_一稱_二念仏名_一。如_二文殊般若等說_一。此亦約_二惣方便_一說也。但此所_レ言一向專稱

ず。もし宗趣分別せば、稱名を以て宗とし、三昧を以て趣とす。しかる三昧に淺深あり。聞思相應は、走れ淺なり。修慧相應は、走れ深なり。聞思相應は、稱名の位に在るべし。修慧相應は、ただ是れ定心なり。しかも念仏三昧の名は二位に通ずと雖も、正しくは修慧相應を以て本とす。もし末を兼ねは、初後皆通ずるなり。もしただ稱名に限ると言はば、念仏三昧の名義、何によつてか立せんや。この故に、善導・元曉の念仏の義、始終全く相違なきなり。しかれば則ち、元曉の積のごとく、菩提心を以て往生淨土の正因とする事、兩師また共同すべし、さらに異義あるべからず。同發菩提心等の善導の積、あにこの意にあらざや。能く能くこれを思ふべし。念仏三昧、定散等の委細の分別は、第五門に至つてこれを悉すべし。

これより第二に、弥陀の本願の中に菩提心なしと言ふ過を破せば、集に曰く、「三輩念仏往生の文。」

仏告阿難○

私に問ひて曰く、○一には、諸行を廢して念仏に歸せんがために、しかも諸行を説くとは、善導の觀經の疏の中に、「上來定散兩門の益を説くと雖も、仏の本願に望むるに、意は衆生をして一向に弥陀仏名を專稱せしむるに在り」と云ふの積の意に准じて、且くこれを解せば、上輩の中に、菩提心等の余行を説くと雖も、上の本願に望むるに、意はただ衆生をして弥陀仏名を專稱せしむるに在り。しかも本願の中には、さらに余行なし。三輩共に上の本願によるが故に、「一向專念無量壽仏」と云ふなり。○まづ上輩について正助を論ぜば、「一向專念無量壽仏」とは、是れ正行なり、または是れ所助なり。「家を捨て欲を棄てて沙門と作り、菩提心を發す」等とは、是れ助行なり、80また是れ能助なり。謂く、往生の業は念仏を本とするが故に、一向に念仏を修せんがために、「家を捨て欲を棄てて沙門と作り、また菩提心を發す」等なり。なかんづく出家發心等とは、且く初出とおよび初發とを指す。念仏は走れ長時不退の行なり、むしろ念仏を妨礙すべけんや」と云云。(已上、集の文。)

決して曰く、觀經の疏に、「上來雖說(乃至)一向專稱弥陀仏名」等と言ふは、この解釈、委細の料簡は、第五門に至つてこれを悉すべし。今且く大綱についてこれを言はば、念仏三昧は、ただ觀經の所説のみにあらず、諸教に多く讚するところなり。況んや往生の一門、この行最も親因とす。その三昧の義、上にこれを成ずるがごとし。三福等の散善は、定着には如かず。日想等の觀は是れ念仏三昧の眷屬なり。しかるにこの念仏三昧を發得するの方便は、一向に仏名を稱するに在り。文殊般若等に説くが

者、依「菩提心」所起行業也。若離「菩提心」、一向專稱義不可成也。是故双觀經說「三輩一向專念義中、皆以「菩提心」為體。即如「經云」。發菩提心、一向專念無量壽仏、(上輩文也)當發無上菩提之心、一向專念無量壽仏、(中輩文也)當發無上菩提之心、一向專意乃至十念念無量壽仏等云云。(下輩文也)解曰、發菩提心、是仏道正因、是体声也。專念弥陀、是往生別行、是業声也。汝捨「体取」業、如「離」火求「煙」。可「咲」可「咲」。當「知」此等解釋文、皆於「菩提心」、置而不「論」之、(此解釋有「菩提心」重細義、亦如「第五門決」。至「彼具可」知)唯就「所起諸行」判之。然言「本願中更無「菩提心」等余行者、何故。第十九願云、發菩提心修諸功德等云云。是豈非「本願」乎。發菩提心之言、処処非「一」。設雖「四十八願中無「菩提心」之名言」、是仏道正因故、可「非」始說之。然於「菩提心」用「余」之字、甚吁吁哉。是以淨土祖師、又有「判」下以「大菩提心」為「本願」。如下「群疑論」第六「中品下生」不「言」聖衆來迎、出「二義」云。中品三人、仏以「大慈大悲」、臨終之時而來迎接、非「是本願」故。中品下生者、仏不「來迎」、非「是經文」也。以「四十八弘誓願」中說。設我得「仏」、十方衆生、發「菩提心」、修「諸功德」、至「心」發願、欲「生」我國、臨「壽終」時、假令不「与」大衆「現」其人前者、不「取」正覺。此願中既言「發菩提心修諸功德不与大衆現其人前著不取正覺」。此發菩提心言、是發「無上大菩提心」。此中品等三人、猶未「發」無上菩提心、但是修「諸功德」願欲「生」者。雖「得」往生、仏不「來迎」、不「違」本願。以「不」發「菩提心」非「是」當於大誓願也云云。非「唯」經文、淨土人師解「積」、亦如是。若言「第十八願無「菩提心」之言者、既云「至心信樂欲生我國」。何此中簡「菩提心」乎。如「上所引群疑論文」次下云。「菓師經中說、八菩薩示「其道路」令「生」西方。此即仏不「來迎」、仏若來迎自引去得「去」西方、何須「菓師瑠璃光」遣「八菩薩」示「其道路」也。故知無「仏」。所「以」仏不「來迎」者、亦是不「違」本誓願。以下「彼人先雖「修」道、以「非」專心決定故、不「至」心發願欲「生」彼國故、菓師經言、而未「定」者。若是至心發願、即非「不定」之人也。又彼經所「明」之行、當「此中品三人」、非「當」本願也。又菩薩処胎經說、衆

*371上

ごとし。これまた惣方便に約して説くなり。ただしここに言ふところの一向專稱とは、菩提心によつて起すところの行業なり。もし菩提心を離れては、一向專稱の義、成ずべからざるなり。この故に、双觀經に三輩一向專念の義を説く中に、皆菩提心を以て体とす。即ち經に云ふがごとし。「發菩提心、一向專念無量壽仏」(上輩の文なり)、「當發無上菩提之心、一向專念無量壽仏」(中輩の文なり)、「當發無上菩提之心、一向專意乃至十念念無量壽仏」等と云云。(下輩の文なり)。

解して曰く、發菩提心は、是れ仏道の正因、是れ体声なり。專念弥陀は、是れ往生の別行、是れ業声なり。汝が体を捨てて業を取るは、火を離れて煙を求むるがごとし。81咲ふべし、咲ふべし。まさに知るべし、これらの解釈の文は、皆菩提心においては、置いてこれを論ぜず(この解釈に菩提心ある委細の義は、また第五門決のごとし、彼に至つて具に知るべし)、ただ所起の諸行についてこれを判ず。しかるに本願の中にさらに菩提心等の余行なしと言ふは、何が故ぞ。第十九の願に云く、「發菩提心、修諸功德」等と云云。是れあに本願にあらずや。發菩提心の言、処処に一にあらず。たとひ四十八願の中に菩提心の名言なしと雖も、是れ仏道の正因なるが故に、始めてこれを説くにあらざるべし。しかるに菩提心において余の字を用ふる、甚だ「吁」たるかな。

是を以て淨土の祖師、また大菩提心を以て本願とすと判ずるあり。群疑論の第六に、中品下生に聖衆來迎と言はざることを釈すとして、一義を出して云ふがごとし。「中品下生に聖衆來迎と言はざることを釈すとして、一義を出して云ふがごとし。「中品の三人は、仏、大慈大悲を以て、臨終の時に來つて迎接す、是れ本願にあらざるが故に。中品下生は、仏、來迎せず、是れ經文脱するにあらざるなり。四十八弘誓願の中に説くを以てなり。「たとひ我、仏を得んに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修して、心を至して發願して、わが國に生れんと欲はん、壽終の時に臨んで、假令大衆とともにその人の前に現せずは、正覺を取らじ。」この願の中に、既に「發菩提心、修諸功德、不与大衆、現其人前者、不取正覺」と言ふ。この發菩提心の言は、是れ無上大菩提心を發すなり。この中品等の三人は、なほ未だ無上菩提心を發さず、ただ是れ諸の功德を修して、願じて生ぜんと欲する者なり。往生を得と雖も、仏、來迎せず、本願に違せず。菩提心を發さざれば、是れ大誓願に當らざるを以てなり」と82云云。ただに經文のみにあらず、淨土の人の師の解釋、また是のごとし。もし第十八の願に、菩提心の言なしと言はば、既に「至心信樂欲生我國」と云ふ。何ぞこの中に菩提心を簡ばんや。上に引くところの群疑論の文の次下に云ふがごとし。「菓師經の中に説く、八菩薩、その道路を示して、西方に生ぜしむ。これ即ち仏、來迎せず、仏も

生作西方業、多分不得生於西方、生於懈慢國中者、此非是專修西方之業至心發願之人。以行業不專發願不至不當本願之故、不來迎。仏若來迎、即是西方淨土業成。豈容仏迎而生懈慢國也。為無量壽經說、三輩人皆發無上菩提之心、悉得仏迎。縱令不見、猶當夢見、而得往生也。〔已上〕解曰、此中既以至心發願、判為大菩提心行人。明知至心信樂之言、專以大菩提心可為先。双觀經三輩、皆以菩提心為往生正因一事、解積又顯然也。若爾者、云非本願立余行名、甚以不可也。

*331下

問。汝不見我集與文乎。我云於淨土宗中唯依附善導一師不依余師。何引懷感積乎。答。若然者、汝集何引道積安樂集等文乎。又若如所言者、汝不可立一宗。凡祖師作書有二例法。謂欲演二宗趣者、就法分教、以理開宗。建立法相、辨定諸門。且約華嚴宗、如五教章探玄記大疏演義抄等是也。此中諍五教十宗之不同、顯六相十玄之宗教。又就禪門、欲熏修法門於己心見法実性者、未必委分別法相名數、融相照性、令觀心無滯。約此門有作書。即如華嚴法界觀五教止觀遊心法界記等是也。諸宗往往有二三門章疏。即約淨土門、如安樂集群疑論等者、多分盛述念仏宗義。如善導所製禮讚觀念法門并觀經疏法事讚等者、是多分就禪門所作也。是故汝若可立一宗者、須好用法相之諸師解積、顯揚念仏宗義。何任心強可定比例法乎。汝依此偏執之故、委細不知念仏義、而任自狂心、作此邪書立一宗。有心人誰依憑之乎。

し來迎して、自ら引去して、西方に去るを得ば、何ぞ薬師瑠璃光仏、八菩薩を遣して、その道路を示すことを須たんや。故に知りぬ、仏なし。仏、來迎せざる所以は、また是れ本誓願に違せず。かの人、先に道を修すと雖も、専心決定にあらざるを以ての故に、是れ至心發願してかの國に生ぜんと欲せざるを以ての故に、薬師經の言は、しかも未だ定まらざる者なり。もし是れ至心發願ならば、即ち不定の人にあらざるなり。またかの經に明かすところの行は、この中品の三人に當る、本願に當るにあらざるなり。また菩薩処胎經に説く、「衆生、西方の業を作すも、多分西方に生ずることを得ず、懈慢國の中に生ず」とは、これは未れ專修西方の業、至心發願の人にあらざる。行業專ならず、發願至らず、本願に當らざるを以ての故に、來迎せず。仏もし來迎せば、即ち是れ西方淨土の業成ず。あに仏迎へて懈慢國に生ずべけんや。無量壽經の説によるに、三輩の人、皆無上菩提の心を發して、ことごとく仏の迎へを得。縱令見ずとも、猶しまさに夢に見て、しかも往生することを得ん。〔已上〕解して白く、この中に、既に至心發願を以て、判じて大菩提心の行人とす。明らかに知りぬ、至心信樂の言は、専ら大菩提心を以て先とすべし。双觀經の三輩、皆菩提心を以て往生の正因とする事、解83積また顯然なり。もししからば、本願にあらざると云ひ、余行の名を立つる、甚だ以て不可なり。

問ふ。汝、わが集の奥の文を見ずや。我、淨土宗の中において、ただ善導一師に依附して、余師によらじと云ひき。何ぞ懷感の積を引くや。

答ふ。もししからば、汝が集に何ぞ道綽の安樂集等の文を引くや。またもし言ふところのごとくならば、汝、一宗を立つべからず。およそ祖師、書を作るに二の例法あり。謂く、宗趣を演べんと欲するには、法について教を分ち、理を以て宗を開く。法相を建立し、諸門を弁定す。且く華嚴宗に約せば、五教章・探玄記・大疏・演義抄等のごとき、是れなり。この中には、五教・十宗の不同を諍ひ、六相・十玄の宗教を顯はす。また禪門について、法門を己心に熏修して、法の実性を見せしめんと欲するには、未だ必ずしも委しく法相名数を分別せず、相を融し性を照して、觀心をして滞りなからしむ。この門に約して作る書あり。即ち華嚴法界觀・五教止觀・遊心法界記等のごとき、是れなり。諸宗に往往にこの二門の章疏あり。即ち淨土門に約せば、安樂集・群疑論等のごときは、多分盛りに念仏の宗義を述べたり。善導所製の禮讚・觀念法門ならびに觀經の疏・法事讚等のごときは、是れ多分、禪門について作るところなり。この故に、汝もし一宗を立つべくは、すべからく好んで法相を述ぶるの諸師の解

次以稱名_レ為_レ正行_レ為_レ所助_レ、以_レ菩提心_レ為_レ助行_レ為_レ能助_レ、更無_レ其謂_レ。若好作_レ正助能所者_レ、可_レ翻_レ汝言_レ曰_レ、謂菩提心者、是正行也所助也、稱名者、是助行也能助也。謂往生之業、以_レ菩提心_レ為_レ本故、為_レ一向熟_レ菩提心_レ、捨_レ家棄_レ欲而作_レ沙門_レ、專稱_レ仏名_レ也。謂菩提心者、是所善之根本、万行尊首也。是故頭密諸經論、皆嘆_レ菩提心_レ為_レ仏道之種子_レ。其証拠如_レ雲霞_レ、不_レ遑_レ毛舉_レ。大日經云、菩提心為_レ因、大悲為_レ根、方便為_レ究竟_レ等云云。華嚴經中、撰徳成因相知識_レ勸_レ菩薩、開_レ二百余門_レ嘆_レ菩提心_レ、寄位差別功德會縁入_レ実妙理、皆表_レ以_レ菩提心_レ為_レ円因_レ故、是故諸大菩薩、頂_レ礼_レ菩提心_レ為_レ所帰依_レ、猶如_レ礼_レ白月初分_レ。法界無差別論、頂_レ礼_レ菩提心_レ曰、稽_レ首_レ菩提心_レ、能為_レ勝方便_レ、得_レ離生老死病苦依過失_レ。彼論長行自釈云、如_レ白月初分_レ故今頂礼云云。又菩提資糧論第一云、何者為_レ如来教量_レ、如_レ世尊説_レ。迦葉、譬如_レ新月便_レ心_レ作_レ礼_レ、非_レ為_レ滿月_レ。如_レ是、迦葉若信_レ我者、心_レ當_レ礼_レ敬諸菩薩等_レ。非_レ為_レ如来_レ。何以故。從_レ於菩薩_レ出_レ如来_レ故云云。又菩提心離相論云、至_レ誠頂_レ礼_レ彼菩提心_レ、如_レ勇健軍執_レ勝器仗_レ。其義亦然。而彼大菩提心所有諸仏世尊諸菩薩摩訶薩、皆因_レ發_レ是菩提心_レ故等云云。此等皆以_レ菩提心_レ為_レ一切仏果妙因_レ故、頂_レ礼_レ之也。是故諸仏家業愛_レ念_レ發_レ菩提心_レ人_レ、猶如_レ世間多貪人敬_レ重有財者_レ。如_レ彼華嚴中_レ彌伽長者_レ下_レ坐_レ礼_レ善財初發心_レ。宗家釈云、如_レ礼_レ白月初分_レ也云云。相_レ翻_レ此_レ故、不_レ念_レ菩提心_レ者、賤_レ之如_レ畜生_レ。如_レ大丈夫論云、若放逸廢忘_レ不_レ念_レ菩提心_レ者、如_レ禽獸_レ無_レ異_レ云云。是故於_レ無量生死中_レ、此心難_レ發_レ。若得_レ起者、即入_レ仏家_レ、種族無_レ瑕玷_レ、終成_レ大覺王_レ。大覺円因、必待_レ大縁_レ萌故、此心難_レ發_レ。如_レ大丈夫論云、為_レ業報_レ障者、不_レ能_レ發_レ菩提之心_レ云云。淨土宗經論文人師解釈、亦以_レ菩提心_レ為_レ正因_レ。汝雖_レ不_レ為_レ規模_レ、文相無_レ隱。处处充滿。自他共所_レ見也。不_レ遑_レ具出_レ

*332下

*332上

釈を用ゐて、念仏の宗義を顯揚すべし。何ぞ心に任せて強ちにこの例法を定むべきや。汝、この偏執によるが故に、委細に念仏の義を知らずして、自らの狂心に任せて、この邪書を作つて一宗を立つ。有心の人、誰かこれを依憑せんや。

次に稱名を以て正行とし、所助とし、菩提心を以て助行とし、能助とすること、さらにその謂なし。もし好んで正助・能所を作らば、汝が言を翻して曰ふべし。謂く、菩提心は、是れ正行なり、所助なり、稱名は、是れ助行なり、能助なり。謂く、往生の業は、菩提心を以て本とするが故に、一向に菩提心を熟せしめんがために、家を捨て欲を棄てて沙門と作り、専ら仏名を稱するなり。謂く、菩提心は、是れ諸善の根本、万行の尊首なり。この故に頭密諸經論に、皆菩提心を嘆じて仏道の種子とす。その証拠、雲霞のごとし、毛挙に遑あらず。大日經に云く、「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす」等と云云。華嚴經の中に、撰徳成因相の知識、勸_レ菩薩、二百余門を開いて菩提心を嘆じ、寄位差別の功德・會縁入_レ実の妙理、皆菩提心を以て円因とすることを表するが故に、この故に、諸大菩薩、菩提心を頂礼して所帰依とす、猶し白月の初分を礼するのごとし。法界無差別論に、菩提心を頂礼して曰く、「菩提心を稽首す、能く勝方便として、生老死病・苦依・過失を離るることを得。」かの論の長行に自ら釈して云く、「白月の初分のごとくなるが故に、今頂礼す」と云云。また菩提資糧論の第一に云く、「何者をか如来の教量とする、世尊の説くのごとし。迦葉、譬へば新月の便ちまきに礼を作すべきのごとし、満月のためにせざれ。是のごとく、迦葉、もし我を信ぜば、まさに諸菩薩等を礼敬すべし。如来のためにせざれ。何を以ての故に。菩薩より如来を出すが故に」と云云。また菩提心離相論に云く、「誠を至してかの85菩提心を頂礼す、勇健の軍の勝器仗を執るのごとし。その義また然り。しかるにかの大菩提心において所有の諸仏世尊・諸菩薩摩訶薩、皆この菩提心を發すに因るが故に」等と云云。

これらは、皆菩提心を以て、一切仏果の妙因とするが故に、これを頂礼するなり。この故に、諸仏の家業、發菩提心の人を愛念す、猶し世間の多貪の人、有財の者を敬重するのごとし。かの華嚴の中に、彌伽長者、坐を下りて、善財の初發心を礼するのごとし。宗家釈して云く、「白月の初分を礼するのごとし」と云云。これに相翻するが故に、菩提心を念ぜざる者をば、これを賤しむること、畜生のごとし。大丈夫論に云ふのごとし。「もし放逸廢忘して菩提心を念ぜざれば、禽獸のごとし、異なることなし」と云云。この故に、無量生死の中において、この心、發し難し。もし起すことを得

云云。凡一代諸經論皆說此義。其文泉涌、其義雲凝。若有初發菩提心者、其功德虛空非喻、類白月之新吐、等青松之萌芽。故經言、一切功德皆於最初菩提心中住。雖終始無異、而先心難。當知以先心為難者、菩提心為難故也。礼初心者、尊重菩提心故也。依上論文、業障深重者、不發菩提心、若廢忘不念者、如畜生。汝即如畜生、又是業障深重人也。一代聖說仏道妙因、都離菩提心無余事。然以菩提心為能助為助行一事、不知能所、不分別傍正。何其迷乎。但此中所破者、汝依以菩提心不為往生正因、云能助云助行。其意許皆以菩提心為傍義也。今破之、以菩提心成諸行本義也。若非此義而泛言之者、正助能所等義、隨事為不定。或有以菩提心為能助、如法界無差別論菩提心名不退失因。能助一切功德令至究竟故。或有以菩提心為所助、如同論出菩提心因義云。信為其種子、般若為其母、三昧為胎藏、大悲乳養人也。香象大師釈云、今此四緣令菩提心起故、名為因。非菩提心与仏為因等云云。或有直以此能助善法為菩提心相。如下起信論說發心相云。直心深心大悲心云云。諸經論中、如此例非一。是故殊破能助助行之言陳下意許也。

次集文、言發心者、且指初發。念仏は長時不退之行、寧容妨礙念仏也。文。此言何謂乎。謂在凡地始發菩提心、立仏子名。雖始終無別、而初心為難者、經論定說非一。此尊重

*333上

つれば、即ち仏家に入る、種族に瑕玷なし、終に大覺王と成る。大覺の円因、必ず大縁を待つて萌すが故に、この心、發し難し。大丈夫論に云ふがごとし。「業報のために障へらるるは、菩提の心を發すこと能はず」と云云。浄土宗の經論の文・人師の解釈、また菩提心を以て正因とす。汝、規模とせずと雖も、文相隠れなし。処処に充滿せり。自他共に見るところなり。具に出ずに違あらずと云云。およそ一代の諸經論に、皆この義を説く。その文、泉のごとくに涌き、その義、雲のごとくに凝れり。もし初發菩提心の者あらば、その功德、尽虚空も喻にあらず、白月の新吐に類し、青松の萌芽に等しくす。故に經に言く、「一切の功德、皆最初の菩提心の中において住す。終始異86なることなしと雖も、しかも先心は難し。」まさに知るべし、先心を以て難しとするは、菩提心を難しとするが故なり。初心を礼するは、菩提心を尊重するが故なり。上の論の文によるに、業障深重の者は、菩提心を發さず、もし廢忘して念ぜざれば、畜生のごとし。汝は即ち畜生のごとし、または業障深重の人なり。一代の聖説、仏道の妙因、都て菩提心を離れては余事なし。しかるに菩提心を以て能助とし、助行とする事、能所を知らず、傍正を分たず。何ぞそれ迷へるや。ただし、この中に破するところは、汝、菩提心を以て往生の正因とせざるによつて、能助と云ひ、助行と云ふ。その意許は、皆菩提心を以て傍とする義なり。今これを破して、菩提心を以て諸行の本とする義を成ずるなり。

もしこの義にあらずして、泛くこれを言はば、正助・能所等の義は、事に随つて不定なりとす。或いは菩提心を以て能助とするあり、法界無差別論に、菩提心不退失因と名づくるがごとし。能く一切の功德を助けて、究竟に至らしむるが故に。或いは菩提心を以て所助とするあり、同論に、菩提心因の義を出して云ふがごとし。「信をその種子とし、般若をその母とし、三昧を胎藏とす、大悲は乳養の人なり。」香象大師釈して云く、「今この四縁、菩提心をして起らしむるが故に、名づけて因とす。菩提心と仏と、因となるにはあらざるなり」等と云云。或いは直にこの能助の善法を以て菩提心の相とするあり。起信論に、發心の相を説いて云ふがごとし。「直心・深心・大悲心」と云云。諸經論の中に、此のごときの例、一にあらざ。この故に、殊に能助・87助行の言陳の下の意許を破するなり。

次に集の文に、「發心と言ふは、且く初發を指す。念仏は是れ長時不退の行なり、むしろ念仏を妨礙すべけんや。」文。この言、何の謂いぞや。謂く、凡地に在つて始めて菩提心を發すに、仏子の名を立つ。始終、別なしと雖も、しかも初心を難とするは、經論

菩提心也。其旨如上引成。如下彼法藏比丘撰取莊嚴淨土之昔、對二世自在王仏、先稱發心之徳、善財童子証得不思議解脫之時、對一一知識、先作我已發心之唱。此發心不退到大覺地、名為仏。是故成仏遲速、唯任發心之退不退。此事自他宗所共許。不足始成立歟。然言發心者指初發心者、後位可退菩提心一耶以否。然者一切菩薩不可成仏果、不可有阿弥陀如来、不可有極樂淨土。苦言置弥陀觀音等諸仏菩薩等、限如我等之愚人者、三世仏家の修行、仏道同、更無異徹。設雖為田夫野客、若發心不退速剋証。雖為王胤貴姓、若不發心輪廻無期。我等已遇仏教。尚所恨者、設雖有暫時發心、難得不退故也。然言發心唯指初心者、令所化勸退心也。是豈不違修因得果之道理乎、非背一代聖教之法印乎。可察可察。

次言念仏は長時不退之行、寧容妨礙念仏也者、又此言何謂乎。先汝所言念仏者、是口稱之行也。若言取五種念仏等行者、此即与菩提心無別。苦言取口稱之行、以此為長時不退之行、口稱者は三昧發得之方便也。方便必得根本捨之。例如彼數息觀等、數息軌儀為得定方便也。若得定已者、捨之。今生猶有中義。如彼畢命為期等行者、約初心稱名劬勞者一説也。然者往生淨土、乃至仏果圓滿位、何有持念珠稱名為先耶。然菩提心者、初後相統。一切功德、離菩提心不成。猶至果位、亦以之為體。如法界無差別論云。由菩提心為最上方便不退失因、一切功德至於究竟、而得彼果。彼果者、即涅槃界等云云。香象大師釈云、言不退失因者、非直当成仏果為最上之因、亦与中間所修諸行作不遠失因。以下離菩提心令中余行退失故。華嚴云、退失菩提心、修諸善根、是為魔業。又釈、以此菩提心得果決定故、云不退之因。謂此心有二力。一令已成之行不致失故、二未成之行不退失故。一得果究竟、謂此菩提言一切功德得彼果者、明心力能令功德至究竟位到彼岸

*333下

の定説、一にあらざ。これは菩提心を尊重するなり。その旨、上に引成するがごとし。かの法藏比丘、莊嚴淨土を撰取せし昔、世自在王仏に對して、まづ發心の徳を稱し、善財童子、不思議解脫を証得するの時、一一の知識に對して、まづ我已發心の唱を作すがとし。この發心不退にして、大覺地に到るを、名づけて仏とす。この故に、成仏の遲速は、ただ發心の退不退に任せたり。この事、自他宗、共許するところなり。始めて成立するに足らざるか。しかるに、發心とは初發心を指すと言はば、後位には菩提心を退すべしや、否や。しからば、一切の菩薩、仏果を成ずべからず、阿弥陀如来もあるべからず、極樂淨土もあるべからず。もし、弥陀・觀音等の諸仏菩薩等をば置いて、我等がごときの愚人に限ると言はば、三世仏家の修行、仏道同にして、さらに異徹なし。たとひ田夫野客たりと雖も、もし發心不退ならば、速かに剋証せん。王胤貴姓たりと雖も、もし發心せずは、輪廻、期なからん。我等已に仏教に遇へり。尚し恨むるところは、たとひ暫時の發心ありと雖も、不退を得難きが故なり。しかるに、發心はただ初心を指すと言ふは、所化をして退心を勧めしむるなり。是れあに修因得果の道理に違せずや、一代聖教の法印を背くにあらざや。察すべし、察すべし。

88 次に、「念仏は是れ長時不退の行なり、むしろ念仏を妨礙すべけんや」と言ふは、またこの言、何の謂ぞや。まづ汝が言ふところの念仏とは、走れ口稱の行なり。もし五種念仏等の行を取ると言はば、これ即ち菩提心と別なからん。もし口稱の行を取つて、これを以て長時不退の行とすと言はば、口稱は是れ三昧發得の方便なり。方便は必ず根本を得つれば、これを捨つ。例せば、かの數息觀等のごときは、數息の軌儀は得定の方便のためなり。もし定を得已りぬれば、これを捨つ。今生猶し中止の義あり。かの畢命為期等の積のごときは、初心稱名劬勞の者に約して説くなり。しからば、淨土に往生し、乃至仏果圓滿せん位まで、何ぞ念珠を保持して稱名を先とすることあらんや。しかるに菩提心とは、初後相統す。一切の功德、菩提心を離れては成せず。猶し果位に至つて、またこれを以て體とす。法界無差別論に云ふがごとし。「菩提心を最上方便不退失の因とするによつて、一切の功德、究竟に至つて、かの果を得。かの果とは、即ち涅槃界なり」等と云云。香象大師釈して云く、「不退失の因と言ふは、直に当成の仏果を最上の因とするのみにあらざ、また中間所修の諸行のために不退失の因と作る。菩提心を離れては、余行をして退失せしむるを以ての故に。華嚴に云く、菩提心を退失し、諸の善根を修する、走れを魔業とす。」また釈す、「この菩提心の得果決定するを以ての故に、不退の因と云ふ。謂くこの心に二力あり。一は已成の行をして失せざ

処^甲云云。乃至衆生菩薩如來三位亦依^二菩提心分位^一立。如^二彼論頌云^一。不淨衆生界、染中淨菩薩、景趣清淨者、是說為^二如來^一。彼論長行広積^二此義^一云云。若爾者、念仏行亦依^二菩提心^一可^二成就^一圓滿。然云^二妨礙念仏^一。此言何狂乱乎。此非^二仏説^一、波旬所説也。如下十住毘婆娑論第四説^二不退相^一中云。惡魔變^二現八大地獄^一、化作^二菩薩^一而話^レ之言、汝若不^レ捨^二菩提心者^一、当生^二此中^一。見^二是怖畏^一而心不^レ捨。文。依^二汝之邪言^一、令^二所化捨離^一菩提心。汝豈非^二惡魔之使^一乎。又如^二第八云^一。菩薩愛^二樂阿耨多羅三藐三菩提者^一、應親近^二云云^一。解曰、愛^二樂無上菩提者^一、即是有^二菩提心^一人也。翻^レ此可^レ知、往生宗行人、不^レ可^レ親^二近汝^一也。悲哉、汝非^二唯不^レ愛^一樂菩提、反^レ妨礙菩提。非^二唯自妨礙^一之、令^二弥陀如來^一妨礙菩提心。是知汝是於^二往生門^一為^二大賊^一。斷^二滅弥陀如來^一大菩提功德故、不^レ可^レ假^二仏子稱^一。何出入僧伽藍中^一乎。汝集出^二三義^一結云、今若依^二善導^一、以^レ初為^レ正耳。〔初者即指^二此義^一也。〕此則毀^二謗善導^一罪人也。豈可^レ為^二其一門^一乎。

*334上

問曰、我信^二樂阿弥陀名号^一故、撥去^二余行^一。撥^二菩提心^一、亦信^二樂名号^一之至極也。設雖^レ為^二非理^一、信^二仏心既深^一。汝何謗^レ我為^二大賊^一乎。答。不^レ信^二仏法者^一、過同^二外道^一。何足^レ可^レ惜。汝入^二仏教一門^一而成^二此大迷^一、甚為^レ可^レ傷。於^二三学雜行^一有^二過者^一、名^二仏法怨賊^一、經論所説章疏定判也。是故設^レ我雖^レ不^レ罵^レ汝、汝之天性、有^二大賊過者^一、可^レ為^二深悲^一。今須^レ詳^二汝邪見過^一。香象大師梵網經疏、積^二謗三宝邪見^一、必具^二五縁^一、便成^レ犯。一對^二人衆^一、一^二三宝境^一、三起^二彼三想^一、四作^二邪見^一、五發^二謗言^一便犯。今汝所立、正具^二此五縁^一。先作^二此書^一授^二所化^一、有^二第一縁^一。二對^二菩提心^一、即有^二第二縁^一。三正起^二善捷心想^一、即有^二第三縁^一。四即有^二此大邪見^一、即有^二第四縁^一。

らしむるが故に、二は未成の行をして退失せざらしむるが故に。二は得果究竟、謂く、これ菩提、一切功德得彼果と言ふは、心力能く功德をして究竟位に至り、彼岸処に到89らしむることを明かす」と云云。乃至衆生・菩薩・如來の三位もまた菩提心の分位によつて立す。かの論の頌に云ふがごとし。「不淨なるは衆生界、染の中に淨なるは菩薩、最極清淨の者、是れを説いて如來とす。」かの論の長行に廣くこの義を釈すと云云。もししからば、念仏の行もまた菩提心によつて成就圓滿すべし。しかるに念仏を妨礙すと云ふ。この言、いかんが狂乱せるや。これ仏説にあらざらず、波旬の所説なり。

十住毘婆娑論の第四に、不退の相を説く中に云ふがごとし。「惡魔、八大地獄を變現して、化して菩薩と作つて、これに語つて言く、汝もし菩提心を捨てずは、まさにこの中に生ぜん。この怖畏を見て、心に捨てず。」文。汝が邪言によつて、所化をして菩提心を捨離せしむ。汝はあに惡魔の使にあらざらんや。また第八に云ふがごとし。

「菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を愛樂する者に親近すべし」と云云。解して曰く、無上菩提を愛樂する者とは、即ち是れ菩提心ある人なり。これに翻して知るべし、往生宗の行人、汝に親近すべからず。悲しきかなや、汝、ただ菩提を愛樂せざるのみにあらず、反つて菩提を妨礙せり。ただ自らこれを妨礙するのみにあらず、弥陀如來をして菩提心を妨礙せしむ。是に知りぬ、汝は是れ往生門において大賊とすといふことを。弥陀如來の大菩提の功德を斷滅するが故に、仏子の稱を仮るべからず。何ぞ僧伽藍の中に入せんや。汝が集に三義を出して結して云く、「今もし善導によらば、初を以て正とするのみ。」〔初とは即ちこの義を指すなり。〕これ則ち善導を毀謗する罪人なり。あにその一門とすべけんや。

90 問ひて曰く、我は阿弥陀の名号を信樂するが故に、余行を撥去す。菩提心を撥する、また名号を信樂するの至極なり。たとひ非理たりと雖も、信仏の心既に探し。汝、何ぞ我を謗じて大賊とするや。

答ふ。仏法を信ぜずは、過、外道に同ず。何ぞ惜しむべきに足らん。汝、仏教の一門に入つてこの大迷を成ず、甚だ傷むべしとす。三学雜行において過ある者を、仏法の怨賊と名づくるは、經論の所説、章疏の定判なり。この故に、たとひ我、汝を罵らずと雖も、汝の天性、大賊の過あらば、深き悲とすべし。今すべからく汝が邪見の過を詳かにすべし。

香象大師の梵網經の疏に、謗三宝の邪見を積するに、必ず五縁を具して、便ち犯を成ず。「二は人衆に對す、二は三宝境、三はかの三想を起す、四は邪見を作す、五は

五發言云「非往生正因」、即有第五緣。就此大過、大師判輕重有六。一約所對。二約所誇。三約能誇。四約所損。五合辨。六自他。初中對二人多人大眾。前輕後重。二約所誇中三寶有三。謂住持并別相及自体、或一二三、各如次、前輕後重。三約能誇、謂心有二品下中上。言有麤細及中、輕重可レ知。四約所損有二。一由此誇故、令多菩提心人於不定者一生退失。二令已信者生退。三未信者不信。四未邪見者生邪見。五已邪見者生堅執。皆前重後輕。五合辨者、對大眾誇勝境。上邪見發麤言。成大損為最重。余如次及交絡、皆有輕重。可レ准知。六自他者、一自二他三俱、皆前輕後重。可レ知。〔已上〕於此六緣中、先約所對、汝對在家出家貴賤上下男女長幼大眾、非輕即為重。第二約所誇、汝之一言、即俱時成誇三寶罪、非一非二。華嚴經云、十方一切如來、從菩提心而出生故。文。然誇菩提心、即誇十方一切仏宝也。又如同上文云。善男子、菩提心者、成就如是無量無辺最勝功德。挙要言之、応知悉与一切仏法諸功德等。何以故、因菩提心、出生一切菩薩行輪。文。相翻此故、汝即誇一切法宝也。又云菩提心者、猶如命根、任持菩薩大悲身故。文。汝斷滅菩薩命根、即誇一切僧宝也。是故約第二緣、最可為最重。約第三緣、可有分別。謂約前所誇義中、以菩提心是三寶種子故、惣就通相門、雖在誘三寶罪中、今就別相門、委可辨輕重。

*334下

誇言を發すに便ち犯す。」今、汝が所立、正しくこの五縁を具す。まづこの事を作つて所化に授くるに、第一の縁あり。二は菩提心に對す、即ち第二縁あり。三は正しく菩提心の想を起す、即ち第三縁あり。四は即ちこの大邪見あり、即ち第四縁あり。五は言を發して往生の正因にあらずと云ふ、即ち第五縁あり。この大過について、大師、輕重を判するに六あり。「二は所對に約す。一は所誇に約す。三は能誇に約す。四は所損に約す。五は合して弁す。六は自他。初の中に、一人・二人、多人・大眾に對す。前は輕く、後は重し。二は所誇に約する中に、三寶に三あり。謂く、住持ならびに別相および自体、或いは一、二、三、おのおの次のごとく、前は輕く、後は重し。三は能91誇に約するに、謂く心に三品あり、下、中、上。言に麤・細および中あり、輕重知るべし。四は所損に約するに五あり。一は、この誇によるが故に、多くの菩提心の人をして、不定者において、退失を生ぜしむ。二に、已信者をして退を生ぜしむ。三は、未信者をして信ぜざらしむ。四は、未邪見の者をして邪見を生ぜしむ。五は、已邪見の者をして堅執を生ぜしむ。皆、前は重く、後は輕し。五は合して弁すと、大眾に對して勝境を誇す。上の邪見をもて麤言を發す。大損を成ずれば、最重とす。余は次の如くおよび交絡して、皆輕重あり。准じて知るべし。六は自他とは、一自、二他、三俱、皆前は輕く、後は重し。知るべし。〔已上〕

この六縁の中において、まづ所對に約するに、汝、在家出家、貴賤上下、男女長幼の大眾に對す、輕にあらざ、即ち重とす。

第二に所誇に約するに、汝が一言は、即ち俱時に誇三寶罪を成ず、一にあらざ、二にあらざ。華嚴經に云く、「十方一切の如來、菩提心より、しかも出生するが故に。」文。しかるに菩提心を誇するは、即ち十方一切の仏宝を誇するなり。また、同じき上の文に云ふがごとし。「善男子、菩提心とは、是のごときの無量無辺の最勝の功德を成就す。要を挙げてこれを言へば、まさに知るべし、ことごとく一切の仏法の諸の功德と等し。何を以ての故に、菩提心に因つて、一切の菩薩行輪を出生するなり。」文。これに相翻するが故に、汝、即ち一切の法寶を誇するなり。また、「菩提心と云ふは、猶し命根のごとし、菩薩の大悲身を任持するが故に。」文。汝、菩薩の命根を斷滅す、即ち一切の92僧寶を誇するなり。この故に第二縁に約するに、最も最重とすべし。

第三縁に約するに、分別あるべし。謂く、前の所誇義の中に約して、菩提心は是れ三寶の種子なるを以ての故に、惣じて通相門について、誇三寶罪の中に在くと雖も、今、別相門について、委しく輕重を弁すべし。

問曰、此撥菩提心邪見、於三寶中、為通撥之乎、為別撥之乎。答。三寶有三、同相別相住持是也。約同相三寶、皆撥之。義准可レ知。今約別相三寶、先就行相麤門言レ之者、於三寶中、撥法寶也。何者仏宝者、一切諸仏也、僧宝者、地上大菩薩等也。以菩提心非彼二種故、即是撥法寶也。於法寶有教理行果四種。以善提心是道諦撰故、於四法寶中、即撥行法也。是故於三寶中、撥法寶一分。於四法寶中、撥行法一分。准前所釈、隨一二三有輕重云云。然者既非全三寶故、為輕。又委解レ之、汝撥菩提心邪見者、三寶四諦皆撥レ之也。何者、謂菩提心者、自性空為性。如前菩提心決成レ之。然汝相違菩提心、立別念仏心。即是可レ為性有心。然三寶四諦、皆畢竟真空為性故、汝雖不二作意、不覺而撥去之也。若云性有者、即同下數論外道計有性與諸法上。若爾者、弥陀有性與凡夫有性一者、即無凡聖不同、淨土有性與穢土有性一者、又無淨穢差別、有此大過也。雖然、汝是仏弟子一分。然愚迷不知法相、誤致此邪見。汝是仏弟子故、無邪師力、披閱聖教故、無邪教力。唯雖有自邪思惟、暗法相故、亦不強盛。是故於能誘縁、可レ非上品。〔此所レ言能誘縁者、成過因縁也。上五縁并下六章名縁者、成道理義縁也。〕可レ有不信弥陀一仏、起上品嫉妬嗔恚等誘三寶一類故、汝異彼類故、能誘因縁是輕。於此第三縁有能一能誘心、二能誘言也。誘心分別雖劣、過相是重、以正因思惟非正因故。誘言亦為重、以正因言非正因故。雖然過相上品因縁不満足故、於第三縁終為輕也。約第四縁、所損五義、汝皆具足之。准前可レ思レ之。謂一依汝邪言、令菩提心不定人皆生退失。二令下樂菩提心人皆生退心。三令未信人弥生不信。四令下未生此邪見人、聞此邪言、皆生邪見。五令已邪見人弥生堅執。愚僧親見聞此事。雖自無分別、依党汝邪義、人多起此見。可レ悲可レ悲。汝若往生極樂者、速可レ救此五類。余人敢無濟度方便歟。約第五縁、汝對大衆撥勝境。此不待レ言。約第六縁、汝及所化俱吐此邪言。即是俱句撰也。尤可

*335上

*335下

問ひて曰く、この撥菩提心の邪見、三寶の中において、通じてこれを撥すとやせん、別に一二を撥すとやせん。
 答ふ。三寶に三あり、同相・別相・住持、是れなり。同相の三寶に約するに、皆これを撥す。義は准じて知るべし。今、別相の三寶に約して、まづ行相の麤門についてこれを言はば、三寶の中において、法寶を撥するなり。何とならば、仏宝とは、一切の諸仏なり、僧宝とは、地上の大菩薩等なり。菩提心は、かの二種にあらざるを以ての故に、即ち是れ法寶を撥するなり。法寶において、教理行果の四種あり。菩提心は、是れ道諦の撰なるを以ての故に、四法寶の中においては、即ち行法を撥するなり。この故に、三寶の中において、法寶の一分を撥す。四法寶の中において、行法の一分を撥す。前の所釈に准ずるに、一、二、三に随つて輕重ありと云云。しからば、既に全三寶にあらざるが故に、輕とす。
 また、委しくこれを解するに、汝が撥菩提心の邪見は、三寶四諦、皆これを撥するなり。何とならば、謂く菩提心とは、自性空を性とす。前の菩提心決にこれを成ずるがごとし。しかるに、汝は菩提心に相違して、別の念仏心を立つ。即ち是れ性有の心93とすべし。しかるに三寶四諦は、皆畢竟真空を性とす。故に、汝、作意せずと雖も、不覺にしてこれを撥去するなり。もし性有と云はば、即ち數論外道の有性と諸法と一なりと計するに同ぜん。もししからば、弥陀の有性と凡夫の有性と一ならば、即ち凡聖の不同なからん、淨土の有性と穢土の有性と一ならば、また淨穢の差別なからん、この大過あるなり。然りと雖も、汝は是れ仏弟子の一分なり。しかるに愚迷して法相を知らず、誤つてこの邪見を致す。汝は是れ仏弟子なるが故に、邪師力なし、聖教を披閱するが故に、邪教力なし。ただ、自らの邪思惟ありと雖も、法相に暗きが故に、また強盛ならず。この故に、能誘の縁において、上品にあらざるべし。〔ここに言ふところの能誘の縁とは、成過の因縁なり。上の五縁ならびに下の六章を縁と名づくるは、道理を成ずる義縁なり。〕
 弥陀一仏をも信ぜずして、上品の嫉妬・嗔恚等を起して三寶を誘する一類あるべきが故に、汝はかの類に異なるが故に、能誘の因縁、是れ輕し。この第三縁において二あり。一は能誘の心、二は能誘の言なり。誘心は、分別、劣なりと雖も、過相、是れ重し、正因を正因にあらざらんと思惟するを以ての故に。誘言もまた重しとす、正因、正因にあらざらんとするを以ての故に。然りと雖も、過相の上品の因縁、滿ぜざるが故に、第三縁において終に輕とするなり。
 第四縁に約するに、所損の五義、汝皆これを具足せり。前に准じてこれを思ふべし。

レ為レ重也。又非唯此邪見、諸過具足也。若離菩提心立三念仏心者、如「前難」。即是可レ為レ性有心。然者此心不三變、為淨土、墮斷過。猶執レ有者、無因有故、即墮常過。即是辺執見也。取「前邪見」及此辺見、為殊勝。即是見取見也。此邪智計得「往生」。即是非道計道戒禁取見也。

又如「宝積經第三十大云」。舍利子、諸仏世尊、具大智力、惣攝諸法、安二処四種鄢陀南中。何等為レ四、所謂一切行無常、一切行苦、一切法無我、涅槃寂滅云云。〈鄢陀南者、此云標相。或云三法印者、合レ苦入無常也。或除涅槃。此唯說有為標相、不レ說無為也。〉然者汝之所計、違三此四標相中一切法無我鄢陀南也。何以得レ知、如下前菩提心辨定門所出教証。法無我平等本來不生自性空心、為菩提心之故也。是以無著莊嚴論第十一云、四法印者、一者一切行無常印、二者一切行苦印、三者一切法無我印、四者涅槃寂滅印。此中応レ知、無常印及苦印為成無願三昧依止、無我印為成三昧依止、寂滅印為成無想三昧依止。菩薩說此四印、為三三昧依止。皆為利三益諸衆生之故。文。又瑜伽論第四十六、名四種法嚧陀南、（此云集施。）說三第三法嚧陀南云、一切諸法皆無レ有。是名第三法嚧陀南。同下文釈云、又請菩薩如實了知有為無為一切諸法二無我性。一者補特伽羅無我性、二者法○我性。於諸法中、補特伽羅無我性者、謂非即有法是真實有補特伽羅、亦非下

*336上

謂く、一は、汝が邪言によつて、菩提心不定の人をして、皆過失を生ぜしむ。二は、菩提心を樂ふ人をして、皆退心を生ぜしむ。三は、未信の人をして、いよいよ不信を94生ぜしむ。四は、未だこの邪見を生ぜざる人をして、この邪言を聞いて、皆邪見を生ぜしむ。五は、已邪見の人をして、いよいよ堅執を生ぜしむ。愚僧、親りこの事を見聞す。自ら分別なしと雖も、汝が邪義を覺くによつて、人多くこの見を起す。悲しむべし、悲しむべし。汝、もし極樂に往生せば、速かにこの五類を救ふべし。余人は、敢へて濟度の方便なからんか。

第五縁に約するに、汝、大衆に対して、勝境を撥す。これ、言を待たず、第六縁に約するに、汝および所化、俱にこの邪言を吐く。即ち走れ俱の句の摂なり、尤も重とすべきなり。

また、ただこの邪見のみにあらず、諸過具足するなり。もし菩提心を離れて念仏心を立てば、前に難するがごとし。即ち是れ、性有心とすべし。しからば、この心は、淨土を變為せざらん、斷の過に墮す。猶し有と執せば、無因にして有なるが故に、即ち常の過に墮つ。即ち是れ辺執見なり。前の邪見およびこの辺見を取つて殊勝とす。即ち是れ見取見なり。この邪智、往生を得と計す。即ち是れ非道計道の戒禁取見なり。

また、宝積經の第三十六に云ふがごとし。「舍利子、諸仏世尊、大智力を具して、惣じて諸法を摂して、四種鄢陀南の中に安處す。何等をか四とする、いはゆる一切行無常、一切行苦、一切法無我、涅槃寂滅」と云云。鄢陀南とは、ここには標相と云ふ。或いは三法印と云はば、苦を合して無常に入るなり。或いは涅槃を除く、これはただ有為の標相を説く、無為を説かざるなり。しからば、汝が所計、この四標相の中的一切法無我鄢陀南に違するなり。何を以95てか知ることを得る、前の菩提心弁定門に出すところの教証のごとし。法無我平等の本來不生自性空の心を、菩提心とするが故なり。是を以て、無著の莊嚴論の第十一に云く、「四法印とは、一は一切行無常印、二は一切行苦印、三は一切法無我印、四は涅槃寂滅印。この中に、まさに知るべし、無常印とおよび苦印とは無願三昧の依止を成ぜんがためなり、無我印は空三昧の依止を成ぜんがためなり、寂滅印は無想三昧の依止を成ぜんがためなり。菩薩、この四印を説いて、三三昧の依止とす。皆、諸の衆生を利益せんがための故に。」文。また瑜伽論の第四十六に、四種法嚧陀南と名づけ（ここに、集施と云ふ）、第三法嚧陀南を説いて云く、「一切諸法、皆、我あることなし。是れを第三法嚧陀南と名づく。」同じく下の文に釈して云く、「また諸菩薩、實のごとく、有為無為一切諸法、二無我性を了知す。一は補特伽羅無我性、二は法無我性。諸法の中

離有法別有^中真實補特伽羅^上。於^レ諸法中、法無我性者、謂^レ於一切言說事中、一切言說自性諸法、都無^レ所有。如^レ是菩薩、如^レ實了^レ知一切諸法皆無^レ有我。〔已上〕解曰、依^レ此等文証、依^レ諸法無我法印、知^レ入法二空義故、違^レ背此空義生^レ我見。依^レ我見生^レ諸煩惱。菩提心順^レ此空義生、遠^レ離我見煩惱。如^レ離相論出^レ菩提心体二云。謂^レ蘊処界離^レ諸取捨、法無我平等、自心本來不生、自性空故。此中云何、謂^レ我蘊等有^レ所^レ表了、而分別心現前無^レ体。是故若常覺^レ了菩提心者、即能安^レ住諸法空相。乃至一論始終、皆說^レ真空無我義。是故汝撥^レ菩提心、立^レ別念仏心。既捨^レ法無我平等心^レ故、違^レ諸法無我法印。其過同^レ外道神我見^レ也。然者不^レ可^レ出生死。如^レ俱舍論第二十九云。越^レ此依^レ余、豈無^レ解脫。理必無^レ有。所以者何、虛妄我執所^レ迷乱故。文。五見煩惱、汝已強盛。何立^レ比見罪^レ為^レ往生正因乎。今引^レ教理檢^レ校汝大罪。須^レ下諷^レ詠此教理^レ為^レ鑑^レ心痛^レ秦鏡^レ而已。

問。香象大師積^レ謗^レ三宝過、出^レ此諸緣。今不^レ謗^レ三宝、何引^レ為^レ証乎。答。雖^レ不^レ出^レ惡言罵^レ詈^レ之、邪見過同^レ之。謗^レ三宝罪依^レ邪見^レ所^レ生也。是故梵網經說^レ謗^レ三宝戒^レ中云、不^レ生^レ信心孝順心、而反更助^レ惡人邪見人謗^レ者、是菩薩波羅夷罪。文。大師又積^レ此戒、皆以為^レ邪見。凡言^レ此戒相、或処直云^レ邪見、或処云^レ愚癡、或処云^レ謗^レ三宝。其義皆同。謂^レ愚癡者有^レ二。一頑愚癡、二邪見愚癡。戒品中所^レ制、是邪見愚癡也。余二種如^レ上可^レ知。汝唯守^レ文不^レ知^レ義趣。依^レ之雖^レ不^レ作意、自招^レ謗^レ法過^レ也。如^レ十地論第一云。違^レ義說者、有^レ三種垢。一者倒說、二謗^レ如来、三誑^レ聞者。又第二云、隨^レ声取^レ義、有^レ五種過。一不正信、二退勇猛、三誑^レ他、四謗^レ仏、五輕法云云。於^レ此等諸過、汝悉具^レ足之。豈非^レ謗^レ三宝罪乎、又非^レ大邪見乎、又非^レ邪見愚癡乎。能可^レ思量之。問。設雖^レ為^レ邪見、汝自不^レ起^レ此見者、於^レ汝不^レ可^レ有^レ過失。

*336下

において、補特伽羅無我性とは、謂く、即ち有法、是れ眞實にして補特伽羅あるにあらず、また有法を離れて別に眞實の補特伽羅あるにあらず。諸法の中において、法無我性とは、謂く、一切の言説の事の中において、一切の言説の自性、諸法、都て所有なし。是のごときの菩薩、実のごとく、一切の諸法、皆我あることなしと了知す。〔已上〕解して曰く、これらの文証によるに、諸法無我の法印によつて、入法二空の義を知るが故に、この空義に違背して我見を生ず。我見によつて諸の煩惱を生ず。菩提心はこの空義に順じて生じて、我見の煩惱を遠離す。離相論に菩提心の体を出して云ふがごとし。〔謂く、蘊・処・界、諸の取捨を離れて、法無我平等にして、自心本來不生、96自性空なるが故に。この中にいかん、謂く我蘊等、表了するところあつて、分別の心現前して体なし。この故に、もし常に菩提心を覺了するは、即ち能く諸法空相に安住す。〕乃至一論の始終、皆真空無我の義を説く。この故に、汝、菩提心を撥して、別の念仏心を立つ。既に法無我平等の心を捨つるが故に、諸法無我法印に違す。その過、外道の神我見に同ずるなり。しからば、生死を出づべからず。俱舍論の第二十九に云ふがごとし。〔これを越えて余によつて、あに解脫なしや。理、必ずあることなし。〕所以いかんとならば、虚妄の我執に迷乱せらるるが故に。文。五見煩惱、汝已に強盛なり。何ぞこの見罪を立てて往生の正因とせんや。今、教理を引いて、汝が大罪を檢校す。すべからくこの教理を諷詠して、心病を鑑みる秦鏡とすべきのみ。

問ふ。香象大師は、謗^レ三宝の過を積すとす、この諸縁を出す。今、三宝を誘せず、何ぞ引いて証とするや。

答ふ。悪言を出してこれを罵言せずと雖も、邪見の過、これに同じ。謗^レ三宝の罪は、邪見によつて生ずるところなり。この故に、梵網經に謗^レ三宝戒を説く中に云く、「信心・孝順心を生ぜずして、しかも反つてさらに惡人・邪見人の謗を助くるは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。」文。大師またこの戒を積するに、皆以て邪見とす。およそこの戒相を言ふに、或る処には直に邪見と云ひ、或る処には愚癡と云ひ、或る処には謗^レ三宝と云ふ。その義皆同。謂く、愚癡とは二あり。一は頑愚癡、二は邪見愚癡。戒品の中に制するところは、是れ邪見愚癡なり。余の二種は、上のごとく知るべし。汝ただ97文を守つて義趣を知らず。これによつて、作意せずと雖も、自ら謗^レ法の過を招くなり。十地論の第一に云ふがごとし。〔義に違して説く者に、三種の垢あり。一は倒說、二は如来を謗す、三は聞者を誑す。〕また第二に云く、「声に隨つて義を取るに、五種の過あり。一は不正信、二は退勇猛、三は誑^レ他、四は謗^レ仏、五は輕法」と云云。これらの諸

然何苦勞作書破之乎。答。如梵網戒本云。菩薩見外道及以惡人、一言謗仏音声、如三百鉞刺心。文。此事亦如是。聞此書種種邪言、有心人可致刺心之痛。若不忍受之者、於仏法無志之所致也。然信邪說罪業、無量無辺。如諸經論說。師及弟子俱墮大地獄。觀仏三昧經中、十六人優婆塞見仏色身如黒象脚。向仏而作是言。我婦依於仏、受三婦依、受持八齋、受五戒法。然我罪咎、但聞仏声不見仏形。每見仏時、如黒象脚。説是語已、拳手推胸、号泣躡地。是時如来、告諸優婆塞。汝等先世無量劫時、於閻浮提、各作国王、主領諸國、快得自在、有諸沙門、為利養故、為汝邪説。不順仏教、法説非法、非法説法。汝等諸人、皆信用之、是人以此諸惡教故、命終之後、墮阿鼻地獄。汝等隨順惡友教故、命終亦墮黒闇地獄。由前聞法善心力故、今遭我世、受持五戒法。今応当仏法僧前、説汝邪見邪友所教、誠心懺悔。諸優婆塞、聞比語、称南無仏、称南無法、称南無僧。説諸罪咎、誠心懺悔。時仏即放眉間大人相光、照諸人心、心意開解、同時即得須陀洹道。諸優婆塞、既得道已、見仏色身、端嚴微妙世間無比。求仏出家成阿羅漢。《略抄》慈恩法苑林章云、又十輪説、《乃至》有無漸僧、於我舍利及我形像及我法僧聖所愛戒、深生敬信、自無邪見、亦令他無。能宣正法、讚嘆不毀。常發正願。隨犯救悔。業障皆除。当知是人信三宝戒力、勝諸外道多百千倍、輪王不及、況余有情。故勸有情、作如是説。於我法中、剃除鬚髮、我終不聽毀辱。罰此出家者、三世諸仏慈悲護念。是故輕毀、即毀諸仏。有無漸僧、毀破禁戒、非聖法器。自起邪見、亦令他起。誹毀三乘、不讚一乘。如是破戒惡行苾芻、誑惑有情、令生惡見、師及弟子俱斷善根、当墮地獄。如是死屍腫脹爛臭。若与交遊共住同事、臭穢薰染、失聖法財。師及弟子俱斷善根、当墮地獄。是故若無初三沙門、於汗道中、求雖破戒不壞正見者、親近承事、聽聞法要。不応親近戒見俱壞惡行苾芻。觀前文意、初無漸者、亦得名為住持僧宝及上

*327上

過において、汝のごときくこれを具足せり。あに謗三宝罪にあらずや、また大邪見にあらずや、また邪見愚癡にあらずや。能く能くこれを思量すべし。問ふ。たとひ邪見とすと雖も、汝自らこの見を起さずは、汝において過失あるべからず。しかるに、何ぞ苦勞して書を作つてこれを破するや。

答ふ。梵網戒本に云ふがごとし。「菩薩は、外道および悪人を見るに、一言をもても仏を謗する音声あれば、三百の鉞をもて心を刺すがごとし。」文。この事、また是のごとし。この書の種種の邪言を聞いて、有心の人は、刺心の痛を致すべし。もし然らずしてこれを忍受する者は、仏法において志のなきが致すところなり。しかるに邪説を信ずる罪業は、無量無辺なり。諸の經論に説くがごとし。師および弟子、俱に大地獄に墮つ。觀仏三昧經の中に、十六人の優婆塞、仏の色身を見るに、具象の脚のごとし。仏に向つてこの言を作す。「我、仏に婦依して、三婦依を受け、八齋を受持し、五戒の法を受く。しかるに我、罪咎ありて、ただ仏声を聞いて仏形を見ず。仏を見る時のごときには、黒象の脚のごとし。」この語を説き已つて、手を挙げて胸を推す、号泣して地に躡る。この時に、如来、諸の優婆塞に告ぐ。「汝等、先世無量劫の時、閻浮提にて地に躡る。この時に、如来、諸の優婆塞に告ぐ。「汝等、先世無量劫の時、閻浮提にて地に躡る。この時に、如来、諸の優婆塞に告ぐ。「汝等、先世無量劫の時、閻浮提にて地に躡る。この時に、如来、諸の優婆塞に告ぐ。」

98において、おのおの国王と作つて、諸国を主領して、快く自在を得、諸の沙門あつて、利養のための故に、汝がために邪説す。仏教に順ぜず、法を非法と説き、非法を法と説く。汝等諸人、皆これを信用して、この人、この諸悪教を以ての故に、命終の後、阿鼻地獄に墮つ。汝等、悪友の教に随順するが故に、命終してまた黒闇地獄に墮つ。前の開法の善心力によるが故に、今、わが世に遭つて、五戒の法を受持す。今まさに仏法僧の前に當つて、汝が邪見、邪友の所教を説いて、誠心に懺悔すべし。」諸の優婆塞、この語を聞いて、南無仏と称し、南無法と称し、南無僧と称す。諸の罪咎を説いて、誠心に懺悔す。時に仏即ち眉間大人相の光を放つて、諸の人の心を照すに、心意開解して、同時に即ち須陀洹道を得。諸の優婆塞、既に道を得已つて、仏の色身を見るに、端嚴微妙にして、世間に比なし。求仏出家して、阿羅漢と成る。」《略抄》

慈恩の法苑林章に云く、「また十輪に説く、《乃至》無慚の僧あつて、わが舍利、およびわが形像、およびわが法僧聖所愛の戒において、深く敬信を生じて、自ら邪見なく、また他をしてなからしむ。能く正法を宣べて、讚嘆して毀らず。常に正願を發す。犯に随つて救悔す。業障皆除くる。まさに知るべし、この人の三宝を信ずる戒力、諸の外道に勝れたること、多百千倍、輪王も及ばず、況んや余の有情をや。故に有情を勧め、是のごときの説を作す。我法の中において、鬚髮を剃除せんもの、我終にこの

座等。僧像亦然。然彼經中第四卷說、若有苾芻於諸根本性重惡中隨犯一罪、雖名破戒惡行苾芻、而於親教和合僧中、所得律儀、猶不斷絕。乃至奇捨所學尸羅、猶有白法香氣。隨逐諸國王等、無有律儀、不應輕慢及加擿罰。彼雖非法器、穢清衆、不捨戒故、猶勝一切在家白衣。犯性罪者、尚應知是。況犯其餘諸小遮罪。此文即是初無漸僧、壞戒有見故、得有戒。後無漸者、善根既斷。戒亦隨無。非住持撰。住持令他善根生故、法隨有故、彼令善滅、法隨滅故、非住持撰。(已上)當知破戒破見二種中、破見過為最重、損自他善根、斷慧命故。汝有此過、何不破之乎。

*37下

問。汝既於第三緣不為上品。其過既可輕。何強責我乎。
答。心違背三宝、起麤惡語、誹謗三宝。以之可為上品。輪王於千子中重衆相具足子。汝可樂為衆相具足仏子。何以無上品謗心為高名乎。然汝依起此見、於仏法無所得。豈可不悲乎。如下和諍論出最極無者過云。如深密經言。若諸有情、性非質直、非質直類、雖有力能思、思所廢立、而復安住自見取中。彼若聽聞如是法已、於甚深密意語言、無力能如實解了、於如是法雖生信解、然於其義、隨言執着。謂一

出家者を毀辱擿罰することを聴さず、三世の諸仏、慈悲護念したまふ。この故に、輕毀すれば、即ち諸仏を毀す。無慚の僧あつて、禁戒を毀破して、聖法の器にあらず。99自ら邪見を起し、また他をして起さしむ。三乗を誹毀し、一乘を讚せず。是のごとき破戒惡行の苾芻、有情を誑惑して、惡見を生ぜしめて、師および弟子、俱に善根を斷じて、まさに地獄に墮つべし。是のごときの死屍臙腫爛臭せり。もしために交遊し共住し同事せば、臭穢薰染して、聖法財を失せん。師および弟子、俱に善根を斷じて、まさに地獄に墮つべし。この故に、もし初三の沙門なくは、汗道の中において、戒を破ると雖も、正見を壞せざらん者を求めて、親近承事して、法要を聴聞せよ。戒見俱壞の惡行の苾芻に親近すべからず。前の文の意を觀するに、初の無慚の者をば、また名づけて住持僧宝および上座等とすることを得。僧像もまた然なり。しかれどもかの經の中の第四卷に説く、「もし苾芻あつて、諸の根本性重惡の中において、随つて一罪をも犯せば、破戒惡行の苾芻と名づくとも、雖も、しかも親教和合僧の中において、所得の律儀、猶し斷絶せず。乃至、所學の尸羅を棄捨すれども、猶し自法の香氣あり。諸の國王等に隨逐せんに、律儀あることなくとも、輕慢しおよび擿罰を加ふべからず。彼、法器にあらずして、清衆を雜穢すと雖も、戒を捨てざるが故に、猶し一切の在家の白衣に勝れたり。性罪を犯する者、尚し是のごとくなるべし。況んやその余の諸の小遮罪を犯すをや。」この文は、即ち是れ初めの無慚の僧は、戒を壞すれども、見あるが故に、戒あることを得。後の無慚の者は、善根既に斷ず。戒もまた随つてなし。住持の撰にあらず。住持といふは、他の善根をして生ぜしむるが故に、法随つて有なるが故に、彼は善をして滅せしむ、法も随つて滅するが故に、住持の撰にあらず。(已上)100まさに知るべし、破戒・破見の二種の中には、破見の過を最重とす、自他の善根を損じ、慧命を斷ずるが故に。汝、この過あり、何ぞこれを破せざらんや。

問ふ。汝、既に第三緣において上品とせず。その過、既に輕かるべし。何ぞ強ちに我を責むるや。
答ふ。心、三宝に違背して、麤惡の語を起して、三宝を誹謗す。これを以て上品とすべし。輪王は千子中において、衆相具足の子を重くす。汝、衆相具足の仏子たらんことを樂ふべし。何ぞ上品の謗心なきを以て高名とせんや。しかるに汝、この見を起すによつて、仏法において所得なし。あに悲しまざるべけんや。和諍論に最極無者の過を出して云ふがごとし。「深密經に言ふがごとし。もし諸の有情、性、質直にあらず、質直の類にあらずして、思所廢立するに力能ありと雖も、しかもまた自見取の

切法決定皆無_レ自性。決定不生不滅、本來寂靜、自性涅槃、由_レ是因緣、於_レ一切法、獲得無見及無相見。由_レ是見_レ故、撥_レ一切相皆是無相、誹_レ撥諸法遍計所執相依他起相_レ成実相。何以故。由_レ有_レ依他起相及_レ成実相_レ故、遍計所執相方可_レ施設。若於_レ二相、見為_レ無相、彼亦誹_レ撥遍計所執。是故說_レ彼誹_レ撥_レ三相。雖_レ於_レ我法_レ起_レ於法想、而非義中起_レ於義想。彼雖_レ於_レ法起_レ信解_レ故、福德增長、然於_レ非義_レ起_レ執着_レ故、退_レ失智慧。智慧退故、退_レ失廣大無量善法。瑜伽論云、如_レ有_レ二類。聞_レ說_レ大乘甚深經典、不_レ能_レ如_レ實解_レ所說義、起_レ如_レ是見、立_レ如_レ是論。一切唯假、是為_レ真実。若作_レ是觀、名為_レ正觀。彼於_レ虛假所依處所実有唯事、撥為_レ非有。是即一切虛假皆無。何當_レ得_レ有_レ一切唯假_レ是為_レ真実。由_レ是道理、彼於_レ真実及_レ虛假_レ二種、俱謗都無_レ所有。當_レ知是名_レ最極無者。一切有智同梵行者不_レ忘_レ共住。世尊依_レ此密意說言、寧如_レ一類起_レ我見者、不_レ如_レ二類惡取空者。〔已上〕汝亦如_レ是。性非_レ質直、非_レ質直類、唯雖_レ有_レ力_レ能立_レ稱名行、而復安_レ住自見取中。於_レ觀經并善導解_レ、無_レ力_レ能如_レ實解了。於_レ念仏行_レ雖_レ生_レ信解、而於_レ汝好持是語等經文、上來雖說等疏_レ、〔此經疏文、委細料簡、如_レ第五門決。〕隨_レ其言執着、迷_レ菩提心義、取_レ稱名_レ為_レ正行。以_レ菩提心_レ名_レ余行。由_レ是因緣、獲_レ得_レ以_レ菩提心_レ不_レ為_レ往生正業_レ大邪見。由_レ此邪見、皆誹_レ撥_レ聖道淨土_レ二門。何以故。聖道門本汝撥_レ之。以_レ菩提心_レ為_レ往生正因。然撥_レ之故、往生行亦不_レ可_レ立。是故於_レ念仏法_レ雖_レ起_レ法想、而於_レ非義中_レ起_レ義想。汝於_レ弥陀教_レ起_レ信解_レ故、雖_レ於_レ往生淨土行_レ為_レ遠因、於_レ非義_レ起_レ執着_レ故、退_レ失智慧。退_レ失智慧_レ故、生_レ大邪見、退_レ失廣大無量善法。准_レ瑜伽論文、可_レ云。汝觀_レ觀經并善導積、不_レ能_レ如_レ實解_レ所說義、起_レ如_レ是見。唯稱名一行、是為_レ往生正因。若如_レ是知_レ是為_レ善導宗義。於_レ稱名所依菩提心、撥_レ為_レ非_レ往生正因。然離_レ菩提心、念仏業不_レ成立。是故汝聖道淨土_レ二業俱謗都無_レ所有。當_レ知汝名_レ最極無者。一切有智同梵行者、不_レ忘_レ共住。汝設雖_レ有_レ二干聖道門、無_レ此邪見者、可_レ得_レ往生。雖_レ入_レ念仏宗、有_レ

*338 上

*338 下

中に安住す。彼、もし是のごときの法を聴聞し已つて、甚深密意の語言において、実のごとく解了するに力能なくして、是のごときの法において信解を生ずと雖も、しかもその義において、言に随つて執着す。謂く、一切の法は決定して、皆自性なし。決定して、不生不滅、本來寂靜、自性涅槃、この因縁によつて、一切の法において無の見および無相のを見を獲得す。この見によるが故に、一切の相は皆是れ無相なりと撥す、諸法の遍計所執相・依他起相・成実相を誹撥す。何を以ての故に。依他起相および成実相あるによるが故に、遍計所執相まさに施設すべし。もし二相において、見と無相とすれば、彼もまた遍計所執を誹撥す。この故に、彼、三相を誹撥すと説く。我101法において法の想を起すと雖も、しかも非義の中に義の想を起す。彼、法において信解を起すが故に、福德增長すと雖も、しかも非義において執着を起すが故に、智慧を退失す。智慧退するが故に、広大の無量の善法を退失す。〔瑜伽論に云く、「一類あるがごとし。大乘甚深の經典を説くを聞いて、実のごとく所説の義を解すること能はずして、是のごときの見を起し、是のごときの論を立つ。一切はただ假なり、是れを真実とす。もしこの觀を作すを、名づけて正觀とす。彼、虚假所依處所の実有唯事において、撥して非有とす。是れ即ち一切虚假、皆なし。何ぞまさに一切ただ假あつて、是れを真実とすることを得べき。この道理によつて、彼、真実とおよび虚假との二種において、俱に誹じて都て所有なし。まさに知るべし、是れを最極無者と名づく。一切有智の同梵行者、共住すべからず。世尊、この密意によつて説いて言く、むしろ一類の我見を起す者のごときは、一類の惡取空の者には如かじ。〕〔已上〕

汝もまた是のごとし。性、質直にあらず、質直の類にあらずして、ただ稱名の行を立つるに力能ありと雖も、しかもまた自見取の中に安住す。觀經ならびに善導の解釈において、実のごとく解了するに力能なし。念仏の行において信解を生ずと雖も、しかも「汝好持是語」等の經文、「上來雖説」等の疏の釈において（この經疏の文、委細の料簡は、第五門決のごとし）、その言に随つて執着す。菩提心の義に迷つて、稱名を取つて正行とす。菩提心を以ては、余行と名づく。この因縁によつて、菩提心を以て往生の正業とせざる大邪見を獲得す。この邪見によつて、皆聖道・淨土の二門を誹撥す。何を102以ての故に。聖道門は、本汝これを撥せり。菩提心を以て、往生の正因とす。しかるにこれを撥するが故に、往生の行もまた立すべからず。この故に、念仏の法において、法の想を起すと雖も、しかも非義の中に義の想を起す。汝、弥陀の教において信解を起すが故に、往生淨土の行において遠因とすと雖も、非義において執着を起す

此邪見者、難_レ期_二往生_一。准_二上所引教量_一、能_レ可_二思量_一而已。

從_レ此第三破_下以_二菩提心_一為_二有上小利_一過_上者、集曰、念_二仏利益之文_一。

無量壽經下云、仏語_二弥勒_一、其有_下得_レ聞_二彼仏名号_一歡喜踊躍乃至一念_上。當_レ知此人為_レ得_二大利_一、則是具_二足無上功德_一。

善導禮讚云、其有_下得_レ聞_二彼弥陀仏名号_一歡喜至_中一念_上、皆得_レ生_レ彼_レ。

私問曰、准_二上三輩文_一、念_二仏之外_一舉_二菩提心等功德_一、何不_レ嘆_レ彼等功德、唯_レ獨讚_二念_二仏功德_一乎。答曰、聖意難_レ測、定有_二深意_一。且依_二善導一意_一而謂_レ之者、原夫仏意正直雖_レ欲_レ說_二唯念_二仏之行_一、隨_レ機一往說_二菩提心等諸行_一、分_二別三輩淺深不同_一。然今於_二諸行者_一、既捨而不_レ嘆、置而不_レ可_レ論者也。唯就_二念_二仏一行_一、既選而讚嘆。思而容_二分別者_一也。〔乃至〕此大利者、是對_二小利之文_一也。然則以_二菩提心等諸行_一而為_二小利_一、以_二乃至一念_一而為_二大利_一也。〔乃至〕然音諸願_二求往生之人_一、何_レ廢_二無上大利念_二仏_一、強修_二有上小利余行_一乎。〔已上集文。〕

推邪輪卷上
決曰、所_レ引壽經并禮讚、既有_二歡喜踊躍之言_一、何_レ簡_二菩提心_一乎。設委解_二菩提心之行相時_一、此文雖_レ非_レ指_二解_二發心行_一等、歡喜踊躍之文、何_レ非_二緣_二發心_一乎。倩案_二文意_一、乃至一念為_二大利_一、一仏

が故に、智慧を退失す。智慧を退失するが故に、大邪見を生じて、廣大無量の善法を退失す。瑜伽論の文に准せば、云ふべし。汝、觀經ならびに善導の積を觀じて、実のごとく所説の義を解すること能はずして、是のごとく是れを知るを善導の宗義とす。称名所依の菩提心において、撥して往生の正因にあらずとす。しかるに、菩提心を離れては、念仏の業、成立せず。この故に、汝、聖道・浄土の二業、俱に謗して都て所有なし。まさに知るべし、汝を最極無者と名づく。一切の有智の同梵行者、まさに共住すべからず。汝、たとひ聖道門にありと雖も、この邪見なくは、往生を得べし。念仏宗に入ると雖も、この邪見あらば、往生期し難からん。上の所引の教量に准じて、能く能く思量すべきのみ。

これより第三に、菩提心を以て有上の小利とする過を破せば、集に曰く、
「念_二仏利益の文_一。」

無量壽經の下に云く、「仏、弥勒に語る、それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす、則ち是103れ無上の功德を具足するなり。」

善導の禮讚に云く、「それかの弥陀仏の名号を聞くことを得て、歡喜して一念に至ることあらんは、皆彼に生ずることを得ん。」

私に問ひて曰く、上の三輩の文に准するに、念_二仏の外_一に菩提心等の功德を挙げたり、何ぞ彼等の功德を嘆ぜずして、ただ独り念_二仏の功德_一を讚するや。答へて曰く、聖意測り難し、定めて深意あらん。且く善導の一意によつてこれを謂はば、原ねみれば夫れ仏意は正直にただ念_二仏の行_一を説かんと欲ふと雖も、機に随つて一往菩提心等の諸行を説いて、三輩淺深の不同を分別するなり。しかるに今諸行においては、既に捨てて嘆ぜず、置いて論ずべからざる者なり。ただ、念_二仏の一行_一について、既に選んで讚嘆す。思ひて分別すべき者なり。〔乃至〕ここに大利とは、是れ小利に対するの言なり。しかれば則ち菩提心等の諸行を以ては小利とす、乃至一念を以ては大利とするなり。〔乃至〕しからば、諸の往生を願求せんの人、何ぞ無上大利の念_二仏_一を廢して、強ちに有上小利の余行を修せんや。〔已上、集の文。〕

決して曰く、引くところの壽經ならびに禮讚に、既に歡喜踊躍の言あり、何ぞ菩提心を簡ばんや。たとひ委しく菩提心之行相を解せん時、この文は、解_二發心・行_一等指すにあらずと雖も、歡喜踊躍の文は、何ぞ緣_二發心_一にあらずらんや。つらつら文の

選択集中摧邪輪卷上

名号、優曇非_レ喻故。歡喜踊躍亦為_二大_レ利、緣_二無上福田_一生_二歡喜踊躍_一故。一事相對思_レ之、以_二一念不_レ為_レ難、以_レ歡喜踊躍_一為_レ難。若無_レ歡喜踊躍之一念、對_レ不_レ念為_二大_レ利。疑謗逆緣、對_レ不_レ聞_二三_レ宝名字、猶為_二大_レ利。如_二生公云_一。菩薩之名、從_二聞謗之日_一起者、即此之謂也。清涼云、不_レ誘不_レ聞、無_レ由_レ取_レ化。文。是故不_レ問_二順違、以_二值遇_一為_レ幸者、即此義也。疑謗尚爾、況於_二一念_一乎。當_レ知此所_レ言一念、所_レ以_二成_二大_レ利_一者、依_二歡喜踊躍心_一所_レ等起_レ故也。彼此和合、語意俱無_二勝劣_一。依_レ此於_二稱名_一立_二念_一、名_一往生宗引_二諸經觀心念_一、為_二口稱誑_一、專_レ擲_レ之。若如_二汝所說_一者、此一念未_レ為_二真_レ大_レ利_一也。然則可_レ翻_二汝言_一云。仏意正直雖_レ欲_レ說_二菩提心_一并大菩提行、隨_レ機一往說_二稱名等易行_一也。是故出_二往生正因_一、以_二菩提心_一為_レ要路。稱名等諸行、隨_レ機有_二差異_一。然以_二菩提心_一為_レ有_二上_レ小_レ利_一、以_二稱名_一為_レ無_二上_レ大_レ利_一、以_レ天_レ為_レ地、以_レ地_レ為_レ天也。何其顛倒乎。如_二華嚴云_一。八万四千法門菩提之心而為_二最勝_一。又云、菩提之心、於_二諸正法甘露味中_一而為_二最勝_一。已上_二二文_一、俱貞元經第三十六略抄之。如_レ此文、諸經論多_レ之。八万四千法門中菩提心最勝。如_二大王垂_三拱於深宮_一。是故同經云、菩提心者、猶如_二帝王_一、一切願中得_二自在_一故。文。然云_二有_{上_レ}、甚以不可也。諸經論皆云_二無_{上_レ}菩提心_一。即積_二其義_一云、更無_二過上_一故、云_二無_{上_レ}也。汝翻_レ此為_二有_{上_レ}。當_レ知是外道也。又華嚴經云、菩提心者、如_二如意珠_一、周_二給一切諸貧乏_一故。菩提心者、如_二賢德瓶_一、滿_二足一切衆生願_一故。菩提心者、如_二如意樹_一、能雨_二一切莊嚴具_一故。又云、菩提心者、猶如_二伏藏_一、能撰_二一切諸佛法_一故。文。然以_二菩提心_一為_二小_レ利_一、譬如_二餓鬼臨_三恒河_一憂_二枯渴_一。可_レ悲可_レ悲矣。

*339上

*339下

意を案ずるに、乃至一念を大利とす、一仏の名号、優曇も喩にあらざるが故に。歡喜踊躍もまた大利とす、無上の福田を縁じて歡喜踊躍を生ずるが故に。二事相對して、104これを思へば、一念を以ては難とせず、歡喜踊躍を以て難とす。もし歡喜踊躍なきの一念は、念せざるに對して大利とす。疑謗の逆緣、三寶の名字を聞かざるに對しては、猶し大利とす。生公の云ふがごとし。「菩薩の名は、聞謗の日より起る」とは、即ちこの謂なり。清涼の云く、「誘せず聞かず、化を取るに由なし。」文。この故に、順違を問はず、值遇を以て幸とするは、即ちこの義なり。疑謗尚し爾なり、況んや一念においてをや。まさに知るべし、ここに言ふところの一念、大利を成ずる所以は、歡喜踊躍の心によつて、等起せらるるが故なり。彼此和合しては、語意俱に勝劣なし。これによつて稱名において念仏の名を立つ。往生宗に諸經の觀心念仏の文を引いて、口稱の誑擲とするは、専らこれに擲れり。もし汝が所說のごとくならば、この一念、未だ眞の大利とせざるなり。しかれば則ち汝が言を翻して云ふべし。仏意は正直に菩提心ならびに大菩提行を説かんと欲すと雖も、機に隨つて、一往稱名等の易行を説くなり。この故に、往生の正因を出すには、菩提心を以て要路とす。稱名等の諸行は、機に隨つて差異あり。しかるに菩提心を以て有上小利とし、稱名を以て無上大利とするは、天を以て地とし、地を以て天とするなり。何ぞそれ顛倒せるや。華嚴に云ふがごとし。「八万四千の法門において菩提の心を最勝とす。」また云く、「菩提の心、諸の正法甘露味の中において最勝とす。」已上二文、俱に貞元經第三十六、これを略抄す。此のごときの文、諸經論にこれ多し。八万四千法門の中に菩提心最勝なり。大王の深宮に垂拱せるがごとし。この故に同經に云く、「菩提心とは、猶し帝王のごとし、一切の願の中に自在を得るが故に。」文。しかるに有上と云ふ、甚だ以て不可なり。諸經論に皆、無上菩提心と云ふ。即ちその義を積して云く、さらに過上無きが故に、無上と云ふなり。汝これを翻して有上とす。まさに知るべし、是れ外道なり。また華嚴經に云く、「菩提心とは、如意珠のごとし、一切の諸の貧乏に周給するが故に。菩提心とは、賢德瓶のごとし、一切衆生の願を満足するが故に。菩提心とは、如意樹のごとし、能く一切の莊嚴具を雨ふらすが故に。」また云く、「菩提心とは、猶し伏藏のごとし、能く一切諸佛法を撰するが故に。」文。しかるに菩提心を以て小利とするは、譬へば、餓鬼の恒河に臨んで枯渴を憂ふるがごとし。悲しむべし、悲しむべし。

選択集中摧邪輪 卷上